福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査報告書（2019 年）

このたびは、「福島子ども健康プロジェクト」が 2013 年 1 月から毎年実施しております「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」にご協力いただき、誠にありがとうございました。おかげ様で、第 7 回調査の報告書が完成しましたのでお送りいたします。

この報告書は、全体的な傾向を把握するために主要な項目を中心に、調査結果を要約したものです。さらに詳細な分析は、下記のホームページに掲載される予定の論文などをご参照ください。

「福島子ども健康プロジェクト」は、今後も福島県中通り 9 市町村の親子の生活と健康状態を定期的に記録し、親子が健やかに生活できる環境を整えるのに必要な施策を明らかにするとともに、原発事故の影響を次世代に伝えていきたいと考えています。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

2019 年 4 月 7 日

【お問い合わせ先】
福島子ども健康プロジェクト
〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立 101 中京大学 成元哲研究室
電話＆FAX：0565-46-6516（直通）
e-mail：sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp
ホームページ：https://fukushima-child-health.jimdo.com/

＊本研究は科学研究費助成事業（15H01971）の研究成果です。

☆ご覧いただくにあたっての注意点

①調査票は、現在も調査対象者からご送付いただいております。今回の報告書は、2019 年 4 月 1 日までに到着した調査票を対象としました。そのため、この報告書の結果は 805 票を集計したものです。

②各グラフの数値は、特にことわりがない限り、回答者全体（805 名）に対する割合です。ただし、小数点第 2 位以下は四捨五入しています。また、非常に小さい数値は表示していませんので、合計は必ずしも 100%にはなりません。

③本調査データを引用される場合は、事前に「福島子ども健康プロジェクト」までご連絡ください。

1 調査の回答状況

1.1 第 7 回調査は 805 名の子どもの母親（保護者）が回答

この調査は、福島県中通り 9 市町村（福島市、桑折町、国見町、伊達市、郡山市、二本松市、大玉村、本宮市、三春町）の 2008 年度出生児 6191 名（生年月日が 2008 年 4 月 2 日から 2009 年 4 月 1 日までのお子さん）のうち、2017 年の第 5 回調査にご回答いただいた方（936 名）を主な対象としています。今回の第 7 回調査は、2019 年 4 月 1 日の時点で、805 名の子どもの母親（保護者）からご回答いただきました。

	第1回調査(2013年)			第2回調査(2014年)			第3回調査(2015年)			第4回調査(2016年)			第5回調査(2017年)			第6回調査(2018年)			第7回調査(2019年)		
地区	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
福島市	2137	883	41.3	883	526	59.5	525	379	72.1	410	328	79.8	327	285	87.2	325	270	83.1	306	260	85.0
桑折町	70	34	48.6	34	22	64.7	22	19	86.4	20	14	65.0	14	12	85.7	14	12	85.7	14	10	71.4
国見町	63	27	42.9	27	13	48.1	13	11	84.6	12	11	91.7	11	9	81.8	9	7	77.8	8	7	87.5
伊達市	404	175	43.3	175	118	67.4	118	89	74.6	94	75	78.7	79	66	83.5	76	59	77.6	67	55	82.1
郡山市	2644	1076	40.7	1076	629	58.5	629	476	75.7	514	390	75.7	390	345	88.5	385	303	78.7	352	313	88.9
二本松市	397	176	44.3	176	111	63.1	111	76	68.5	80	72	88.8	72	61	84.7	73	60	82.2	66	55	83.3
大玉村	81	44	54.3	44	27	61.4	27	21	77.8	22	20	90.9	20	15	75.0	20	16	80.0	17	16	94.1
本宮市	290	125	43.1	125	82	65.6	82	60	72.0	62	48	77.4	48	45	93.8	47	38	80.9	45	37	82.2
三春町	105	34	32.4	34	15	44.1	15	10	66.7	12	10	83.3	10	8	80.0	10	7	70.0	8	8	100.0
その他*		54		54	63		63	68		71	53	73.2	55	49	89.1	60	47	78.3	53	44	83.0
計	**6191**	**2611** **2628**	**42.2** **42.4**	**2628**	**1584** **1606**	**60.3** **61.1**	**1605**	**1205** **1209**	**75.2** **75.3**	**1297**	**1015** **1021**	**78.3** **78.7**	**1026**	**895** **912**	**87.2** **88.9**	**1019**	**819** **832**	**80.4** **81.6**	**936**	**805**	**86.0**

表 1-1 地区ごとの回答状況：A 調査対象者数 B 回答数 C 回答率（%）

*B,C の計の上段は各報告書作成時点の数、下段は 2019 年 4 月 1 日時点での数です。

*「その他」は調査対象地域の 9 市町村の住民基本台帳に 2012 年 10 月から 12 月までに記載されていた方で、それぞれの調査時点で「9 市町村外」に転居された方の人数です。

*第 2 回調査（2014 年）と第 3 回調査（2015 年）において、「その他」の回答数が対象者数を上回っています。これは、それぞれ前回の調査票に記入された住所に送付しましたが、転居などで「9 市町村外」に移動した場合、「その他」に分類されるためです。

*第 4 回調査の対象者数が第 3 回調査の回答数を上回っています。これは、第 4 回調査は 2015 年 11 月末時点での第 3 回調査回答者（1207 名）に加えて、第 1 回調査協力者で第 3 回調査未回答者の中から再協力者（90 名）を加えたためです。

*第 5 回調査は、第 4 回調査の回答者（1021 名）に加えて、第 4 回調査には回答していないが、住所変更などのお便りをくださった方（5 名）を含めて 1026 名を対象としています。

*第 6 回調査は、第 4 回調査の回答者（1021 名）のうち、転居等で住所不明になり第 5 回調査票を届けられなかった方（2 名）を除いた 1019 名を対象としています。

*第 7 回調査は、第 5 回調査の回答者（912 名）に加えて、第 5 回調査には回答していないが、第 6 回調査に回答してくださった方（24 名）を含めて 936 名を対象としています。

2 子どもの生活

2.1 子どもの「外遊び」時間が減少

昨年に引き続き、「1 時間以上」外遊びをする割合が減少しています。小学校 4 年生となり、遊び方に変化が生じたこと、習い事等に費やす時間が増えたことなどが原因と推測されます。

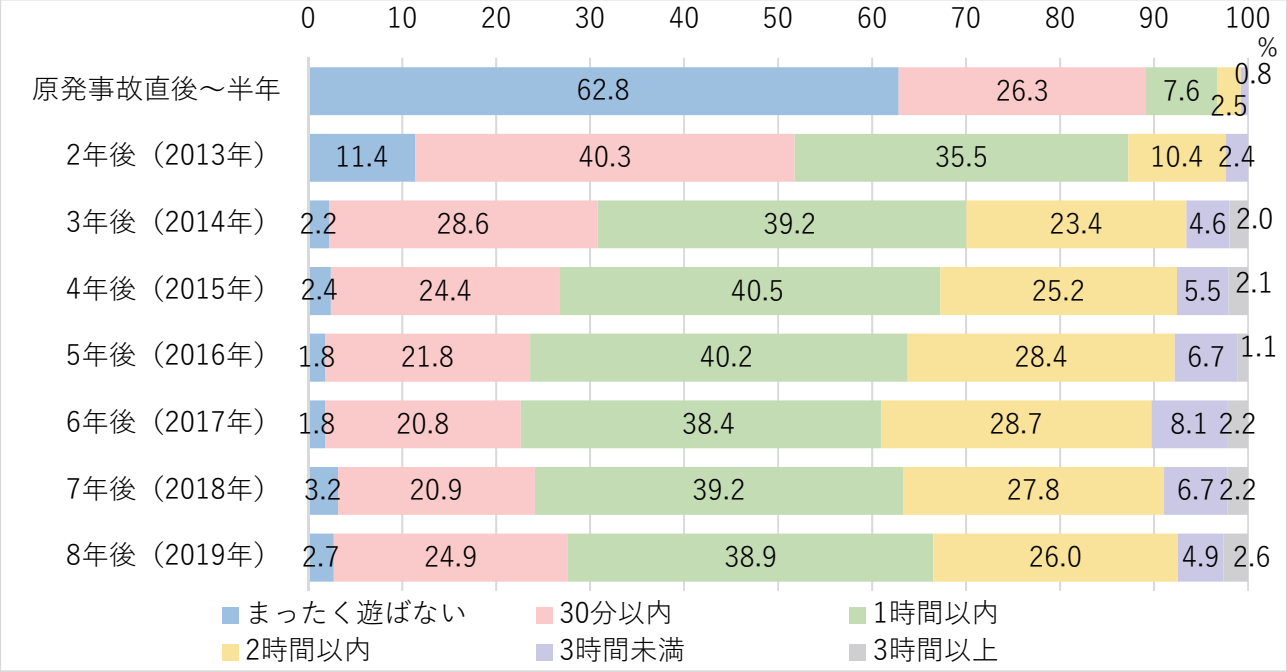


図 2-1 子どもの外遊び時間

2.2 「テレビ・インターネット」を 2 時間以上視聴する子どもは約 4 割

約 4 割の子どもが、テレビやインターネット（ゲーム、動画、SNS を含む）を「2 時間以上」視聴し、「3 時間以上」視聴する子どもも増加しています。

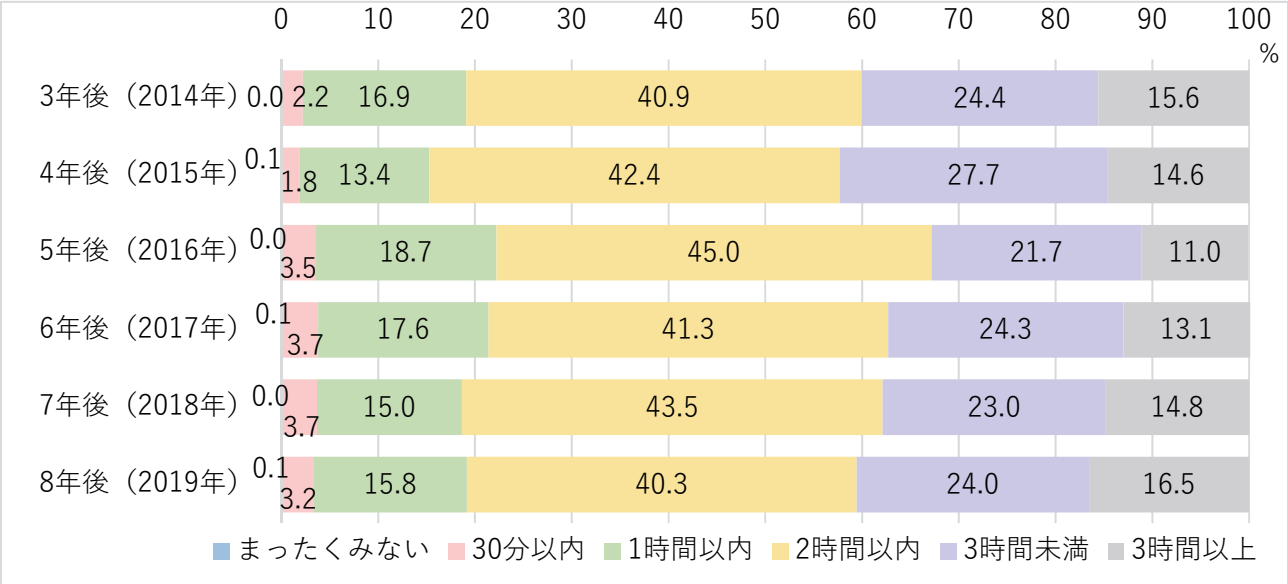
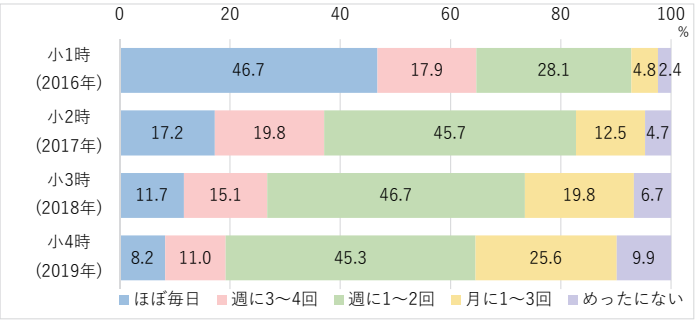


図 2-2 テレビ・インターネットの視聴時間

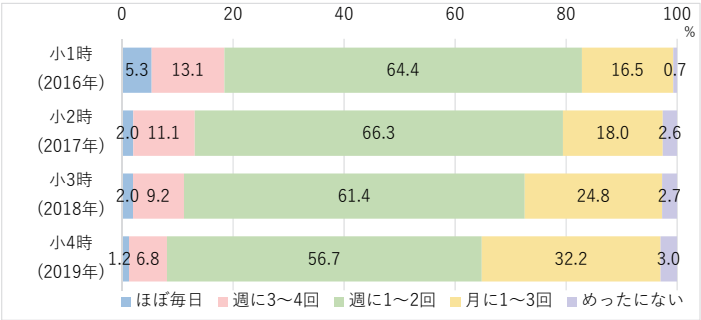
2.3　「お子さんと遊ぶ機会」「お子さんと一緒に買い物に行く機会」が年々減少

子どもの学年が進むにつれ、「お子さんと遊ぶ機会」「お子さんと一緒に買い物に行く機会」が減少しています。子どもの成長とともに、交友関係や勉学・趣味活動など家庭外での生活が広がり、親子で一緒に行動する機会が減っていることがわかります。ただ、「父親の育児参加頻度」と「親子で食卓を囲む機会」はそれほど変化していません。

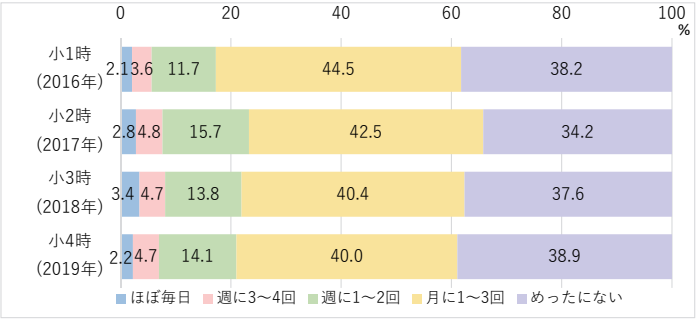
お子さんと遊ぶ機会



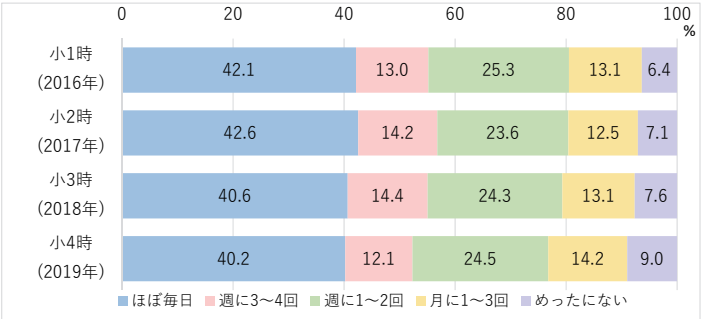
お子さんと一緒に買い物に行く機会



お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚と訪問し合う頻度



お父さん（または父親の代わりとなる人）の育児に参加する頻度



お子さんが両親（または母親、父親の代わりになる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会

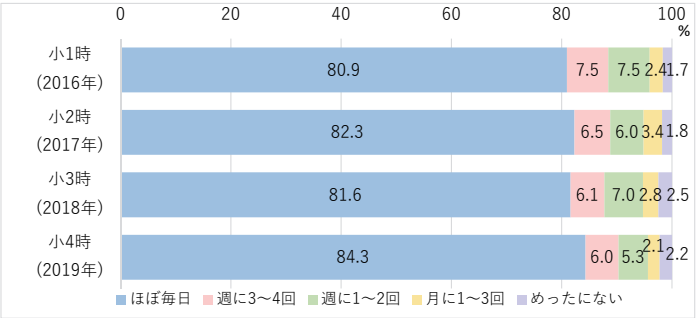


図 2-3　子どもと一緒に過ごす機会

3 子どもの発達と健康

3.1 子どもの適応と精神的健康は年々、支援の必要性が低くなっている

子どもの適応と精神的健康について、SDQ日本語版を使って評価しました。SDQ日本語版は「情緒」「行為」「多動・不注意」「仲間関係」「向社会性」の5領域から構成されています。「情緒」は抑うつや不安など情緒の問題、「行為」は反抗挑戦性や反社会的行動、「多動・不注意」は不注意や集中力の欠如、「仲間関係」は友人からの孤立や不人気など、「向社会性」は協調性や共感性を、それぞれ意味します。「向社会性」のみ、点数が低いほど、それ以外の項目は点数が高いほど、支援の必要性が高いことを示します。

図3-1は、これまでの経年変化とMoriwakiらの全国の小学4年から6年生8,584名を対象とした調査結果（赤）[*1]を示しています。小学校入学前は支援の必要性が高かった「行為」「多動・不注意」「向社会性」も、入学後は支援の必要性が低くなっています。ただ、全国の小学4年生から6年生の結果と比較すると、「向社会性」以外の4項目において支援の必要性が高いという結果が示されました。SDQで評価する子どもの適応と精神的健康は、一般的に年齢が高くなると支援の必要性が低くなるため、今後の経過を引き続き観察する必要があると考えます。

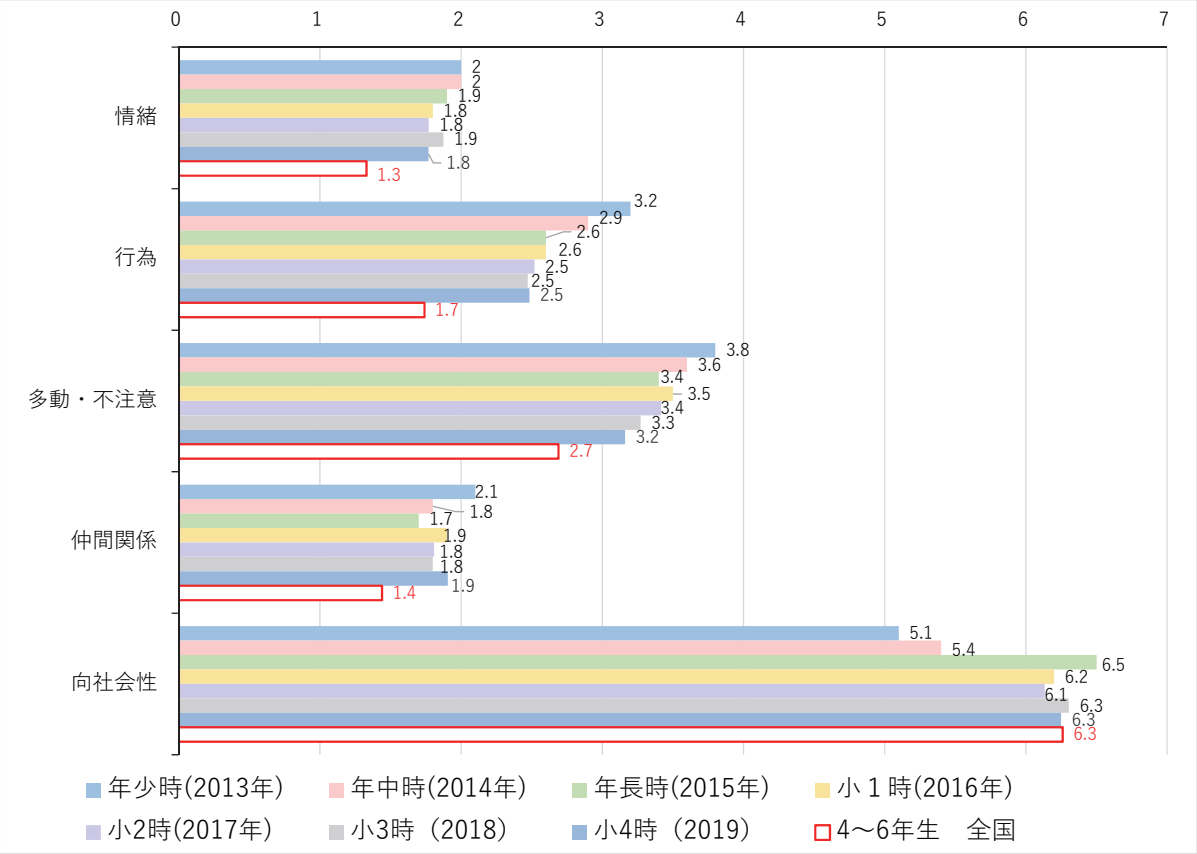


図 3-1　SDQ 得点

*1 Moriwaki A and Kamio Y, 2014, Normative data and psychometric properties of the strengths and difficulties questionnaire among Japanese school-aged children, Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health,21;8(1):1. doi: 10.1186/1753-2000-8-1.

3.2　SDQ 総合得点は、女子は全国調査より「正常」の割合が高く、男子は低い傾向

SDQ の 5 領域「情緒」、「行為」、「多動・不注意」、「仲間関係」、「向社会性」のうち、「向社会性」以外の 4 領域の点数を合計したものを、「SDQ 総合得点」と言います。SDQ 総合得点は、その得点に応じて「正常」「境界」「臨床」の 3 つに分けられます。図 3-2 は、SDQ 総合得点の経年変化を男女別に示したものです。

女子の「正常」の割合は増加し、前掲の Moriwaki らの全国調査に比べ、その割合が高いことがわかりました。一方、男子は全国調査と比較すると、「正常」の割合が低いようです。「臨床」は全国調査においてその割合は 10.3%、本調査では 18.0%ですので、男子は経過観察が必要であると考えられます。

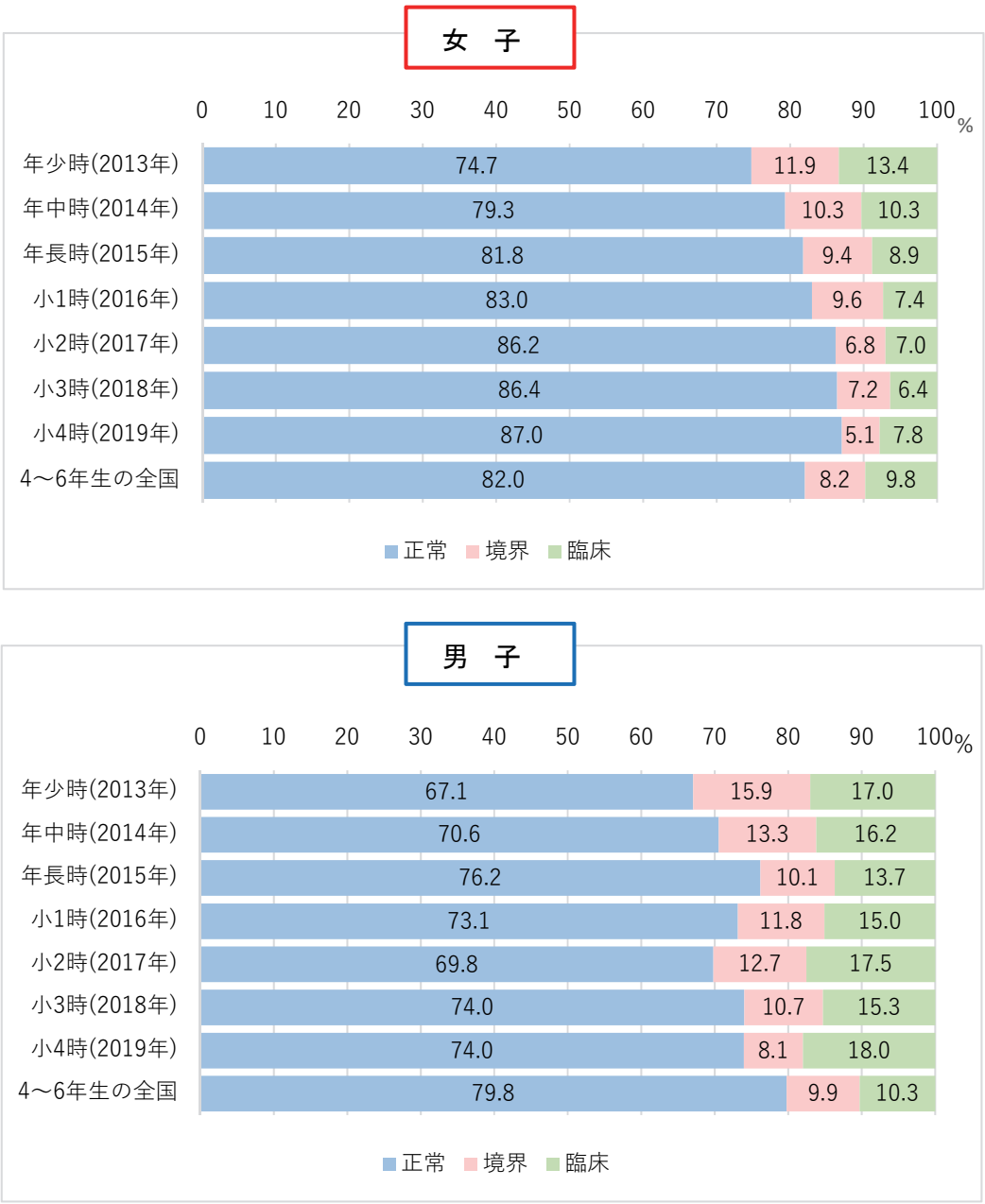


図 3-2　性別ごとの SDQ 総合得点

3.3　子どもの健康状態は「良好」が続いている

「良い」と回答した人の割合は 2015 年以降 6～7 割で推移しています。「良い」と「まあまあ良い」を合計した割合も 9 割後半を維持し、良好な状態であることがわかります。

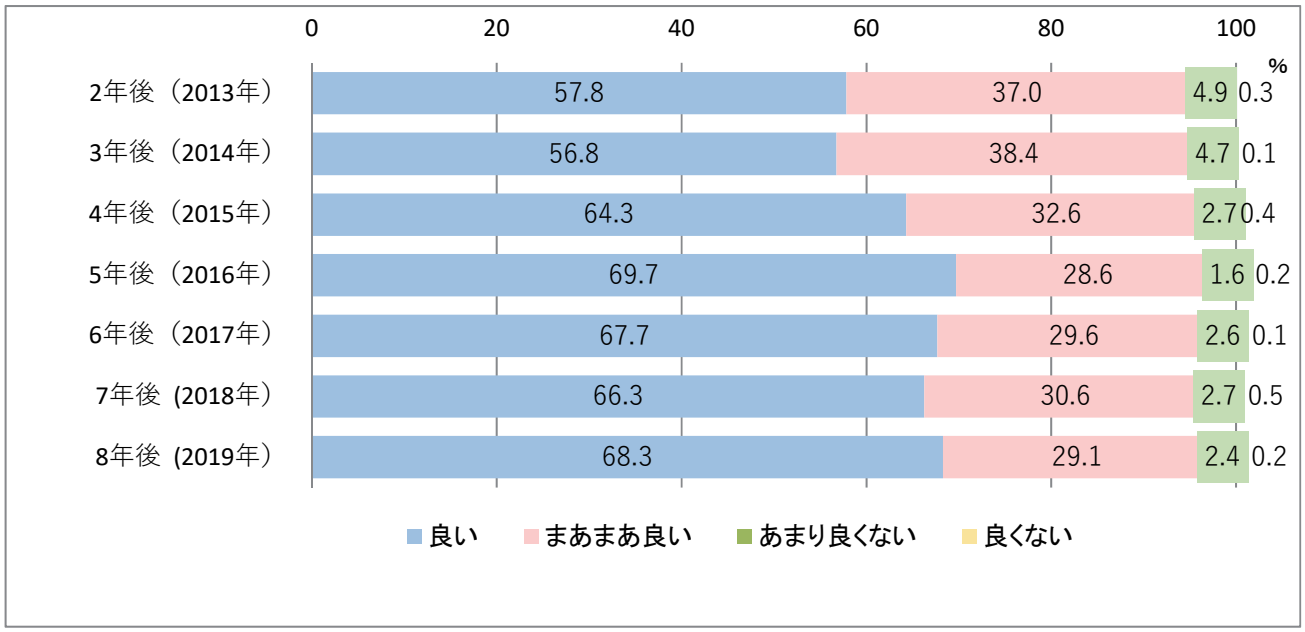
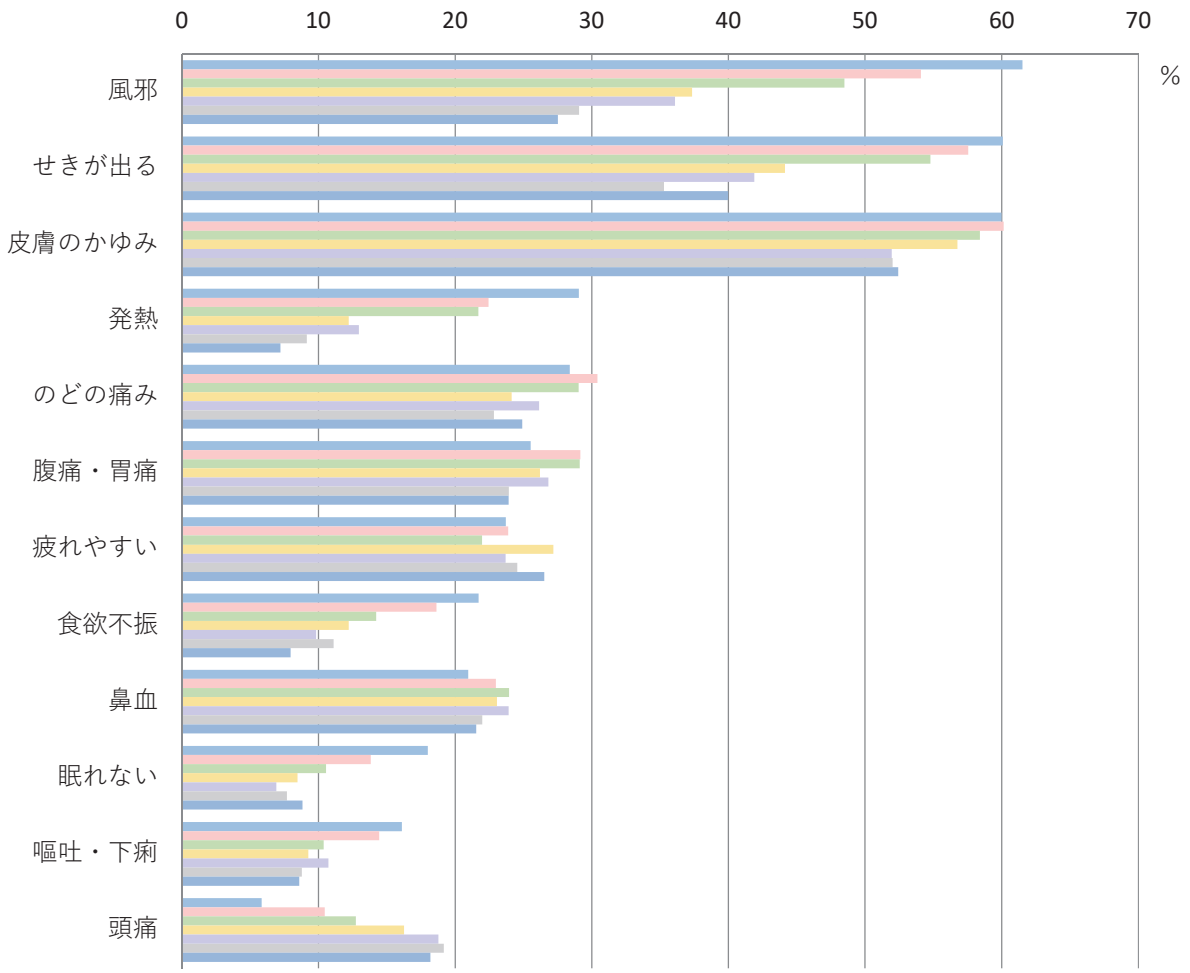


図 3-3 子どもの健康状態

3.4　子どもの症状のうち最も多いのは「皮膚のかゆみ」

身体症状は 7 項目で減少、あるいは横ばい傾向にありますが、「せきが出る」「皮膚のかゆみ」「のどの痛み」「疲れやすい」「眠れない」は増加しました。子どもの症状のうち、「皮膚のかゆみ」が最も多くみられました。



	頭痛	嘔吐・下痢	眠れない	鼻血	食欲不振	疲れやすい	腹痛・胃痛	のどの痛み	発熱	皮膚のかゆみ	せきが出る	風邪
2年後（2013年）	5.8	16.1	18.0	21.0	21.7	23.7	25.5	28.4	29.1	60.0	60.1	61.5
3年後（2014年）	10.5	14.4	13.8	23.0	18.6	23.9	29.2	30.4	22.4	60.1	57.5	54.1
4年後（2015年）	12.7	10.4	10.6	23.9	14.2	22.0	29.1	29.0	21.7	58.4	54.8	48.5
5年後（2016年）	16.3	9.3	8.5	23.1	12.2	27.2	26.2	24.1	12.2	56.7	44.1	37.3
6年後（2017年）	18.8	10.7	6.9	23.9	9.8	23.7	26.8	26.1	13.0	52.0	41.9	36.1
7年後（2018年）	19.2	8.8	7.7	22.0	11.1	24.5	23.9	22.8	9.2	52.0	35.3	29.1
8年後（2019年）	18.2	8.6	8.8	21.5	8.0	26.5	23.9	24.9	7.2	52.4	40.0	27.5

図 3-4　ここ半年間の子どもの症状　＊「よくある」＋「ときどきある」の割合

4 母親の心身の健康

4.1 母親の健康状態もおおむね良好

母親の健康状態は「良い」と「まあまあ良い」を合計した割合が 2015 年以降継続して 8 割を超えており、おおむね良好であることがわかります。

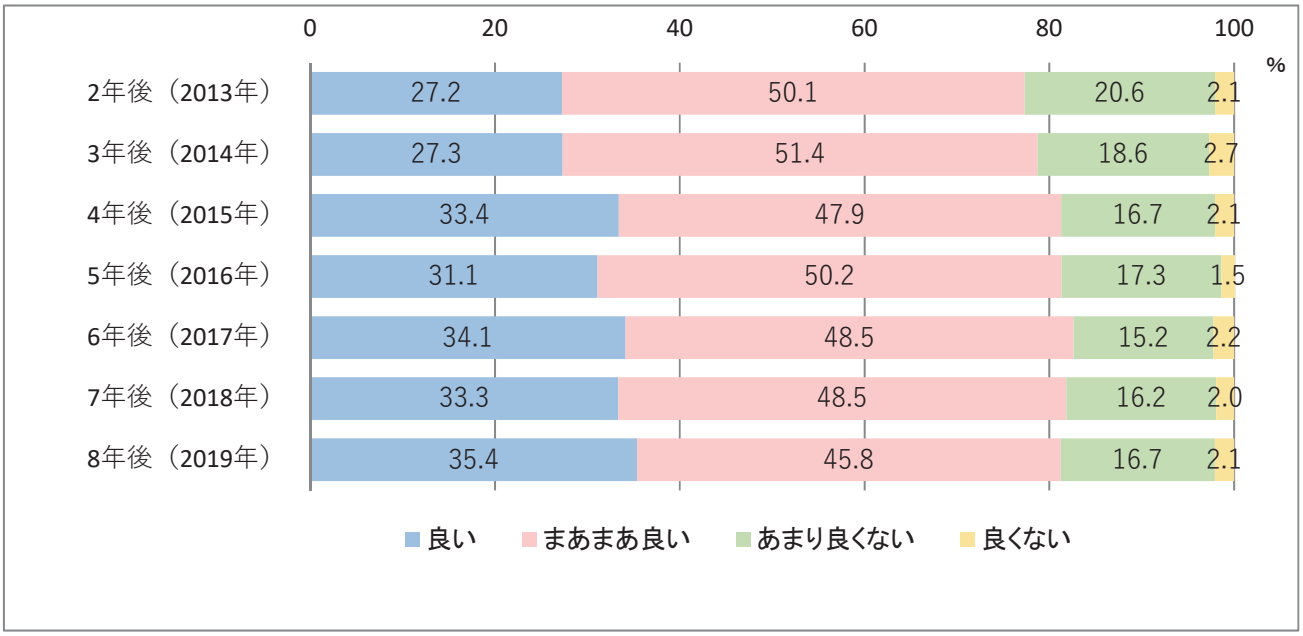
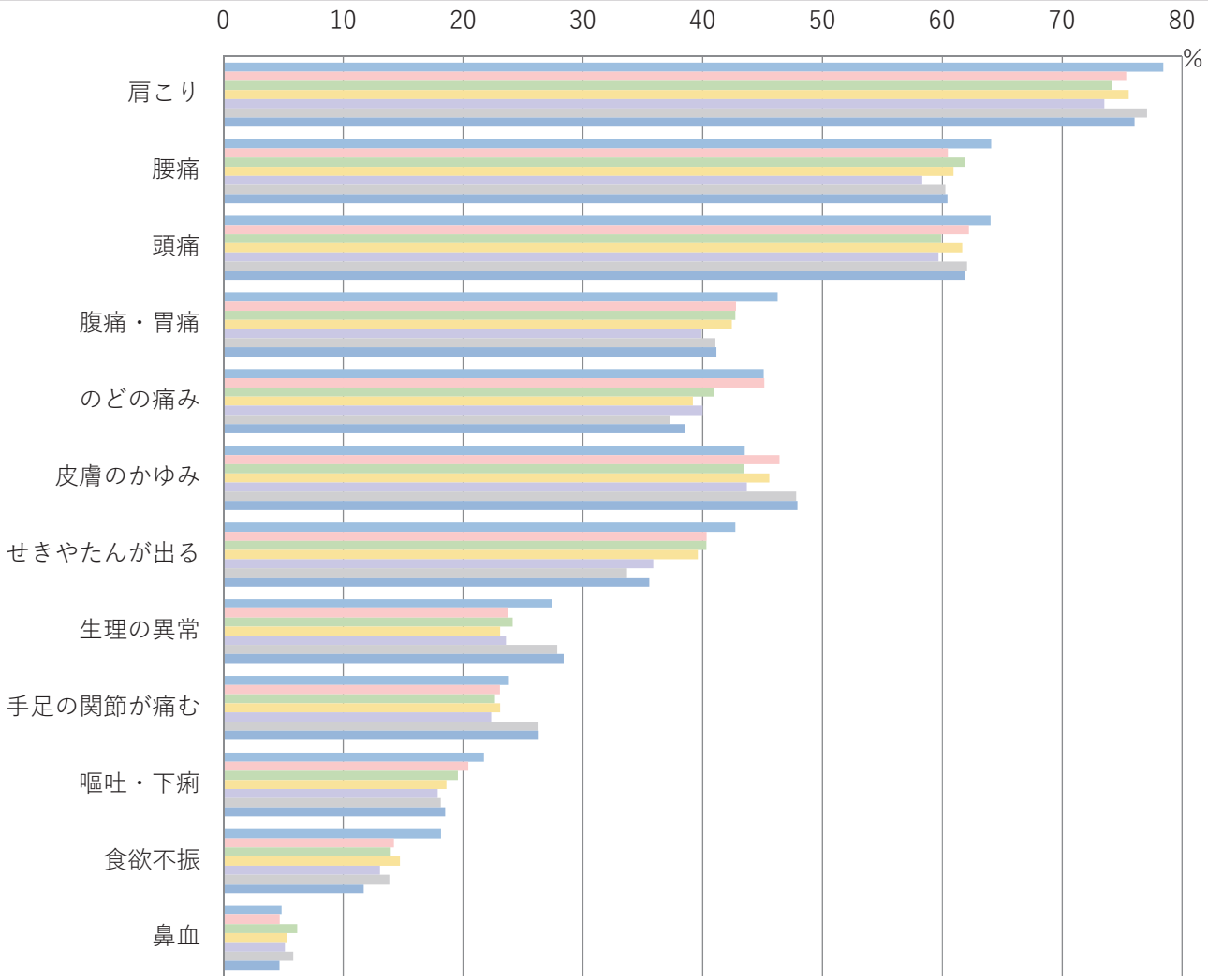


図 4-1 母親の健康状態

4.2　母親の有訴率は昨年に比べて上昇している

母親の自覚症状は、昨年より有訴率が高くなっています。「皮膚のかゆみ」「生理の異常」「手足の関節が痛む」は本調査を開始して以来、最も高い有訴率です。



	鼻血	食欲不振	嘔吐・下痢	手足の関節が痛む	生理の異常	せきやたんが出る	皮膚のかゆみ	のどの痛み	腹痛・胃痛	頭痛	腰痛	肩こり
2年後（2013年）	4.9	18.1	21.7	23.8	27.4	42.7	43.5	45.1	46.3	64.0	64.1	78.4
3年後（2014年）	4.7	14.2	20.4	23.1	23.8	40.3	46.4	45.1	42.8	62.2	60.4	75.3
4年後（2015年）	6.2	14.0	19.6	22.6	24.1	40.3	43.4	41.0	42.7	59.9	61.9	74.2
5年後（2016年）	5.3	14.7	18.6	23.1	23.1	39.6	45.6	39.2	42.4	61.7	60.9	75.5
6年後（2017年）	5.1	13.1	17.9	22.3	23.6	35.9	43.7	40.0	39.9	59.7	58.3	73.5
7年後（2018年）	5.8	13.9	18.1	26.3	27.8	33.7	47.8	37.3	41.1	62.0	60.2	77.1
8年後（2019年）	4.7	11.7	18.5	26.3	28.4	35.5	47.9	38.5	41.1	61.8	60.4	76.0

図　4-2　ここ半年間の母親の自覚症状

＊「よくある」＋「ときどきある」の割合

4.3　母親の心の状態は安定している

下記 6 項目は、心の健康状態を調べる際に広く利用される指標（K6）です。原発事故直後から半年後にかけて母親の心の状態は不安定でしたが、その後、安定しています。ただ、「神経過敏」「気が晴れない」「何をするのも骨折り」の 3 項目については、ここ数年、「いつも」「たいてい」「ときどき」が 2 割前後で推移しています。

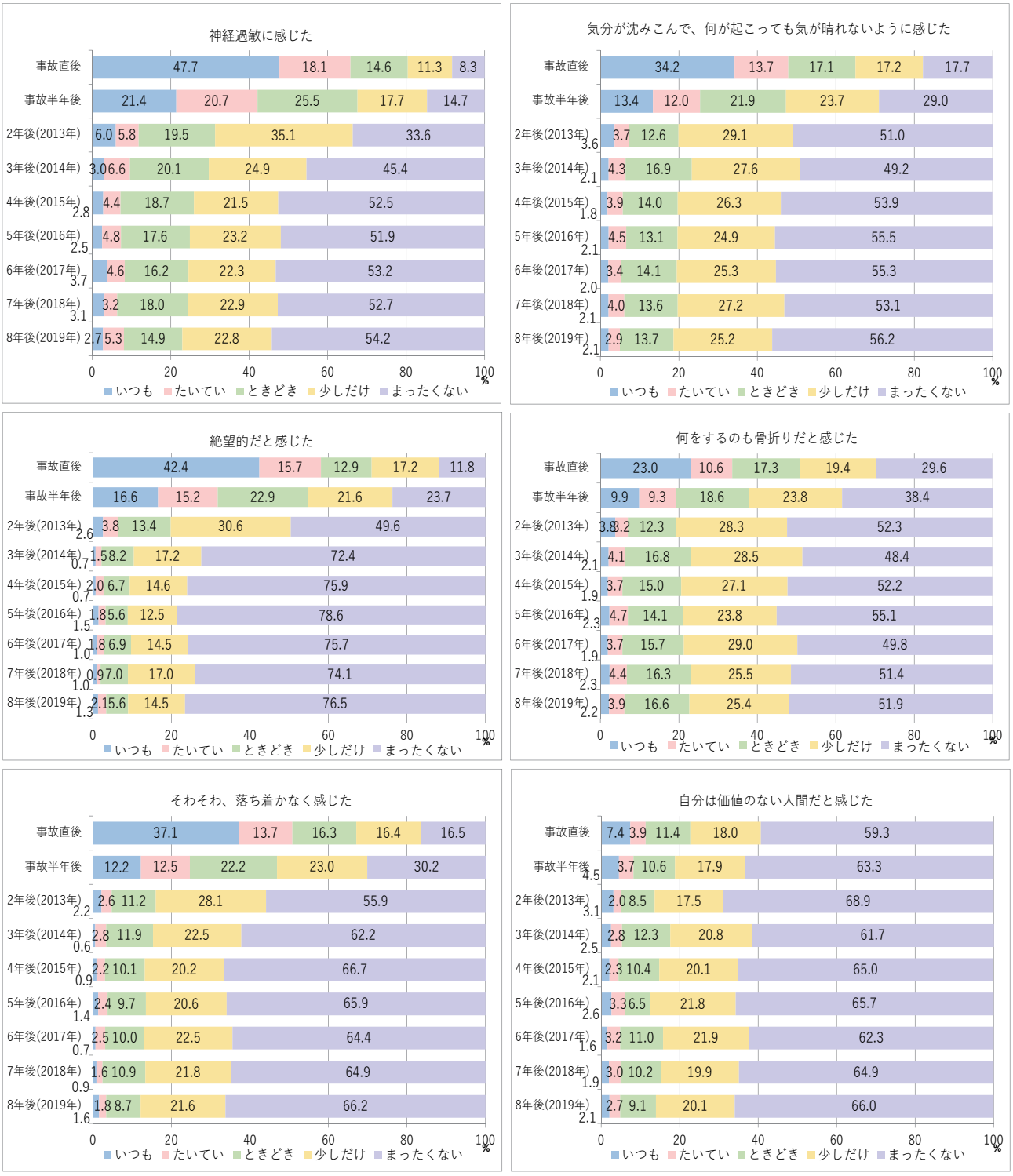


図　4-3　母親の心の健康状態

4.4　6 割以上の方に「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすく身体がだるい」との訴え

下の項目は、「災害後に特化した心の健康状態」を評価する指標（SQD）です。本来 12 項目ですが、ここでは上位 6 項目を示します。

災害から 8 年近く経過した時点で、6 割以上の方が「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすく身体がだるい」と訴えています。これは、先に示した図 4-3 の「一般的な心の健康状態」を評価する指標（K6）においても、「神経過敏」「気が晴れない」「何をするのも骨折り」の有訴率が高いことと符合しているように見受けられます。

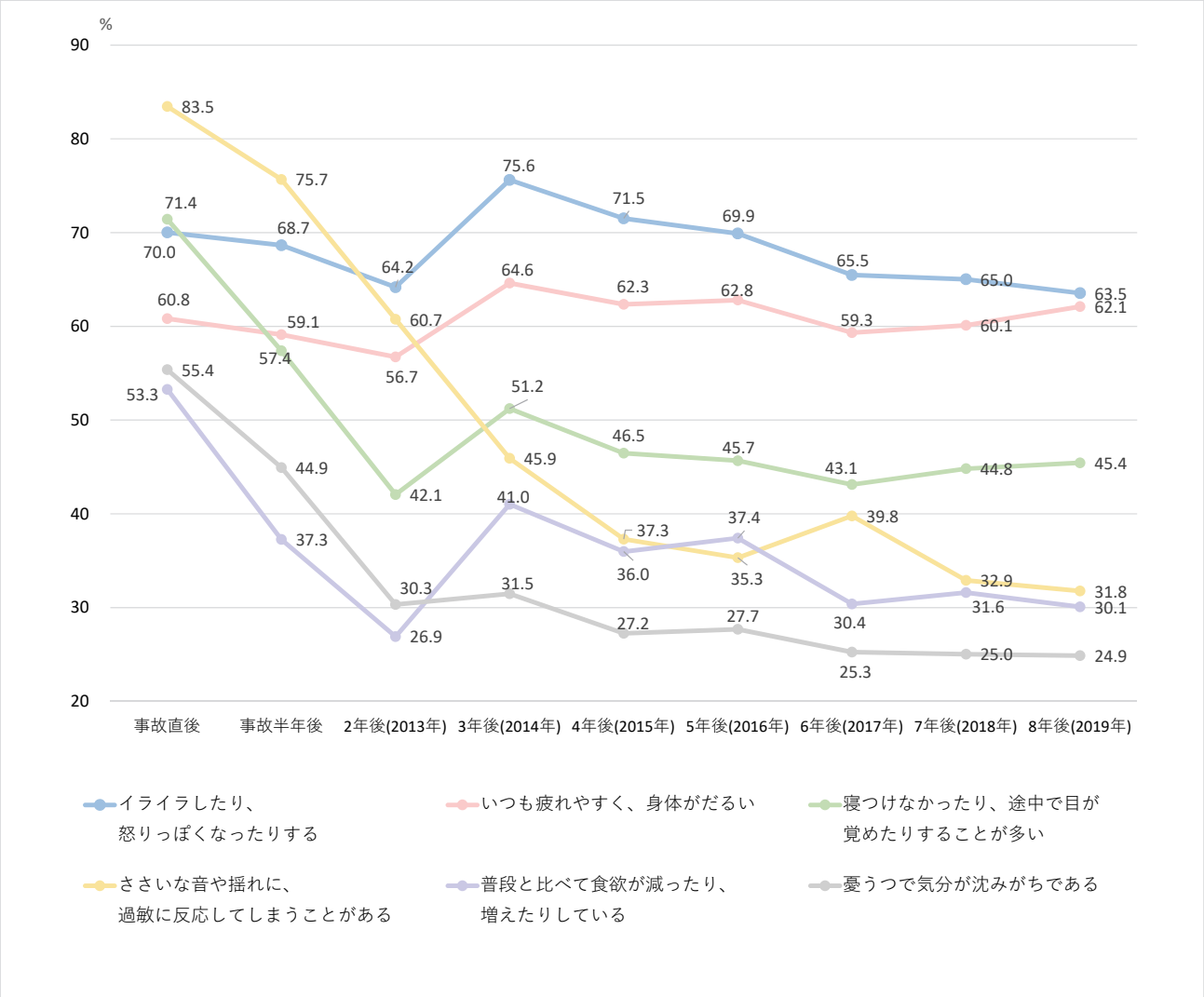


図 4-4　災害後の母親の心の健康状態

＊「よくある」＋「ときどきある」の割合

5 原発事故後の生活変化

5.1 地域の放射能汚染の深刻度、7 割以上が「深刻ではない」と回答

「お住まいの地域の放射能汚染について、どの程度深刻だと考えているか」については、「深刻ではない」「あまり深刻ではない」を合計した割合が 72.6%と初めて 7 割を超えました。除染が進み、地域によっては汚染土も撤去され、地域の放射能汚染の深刻度に対する認識が徐々に低下しているのかもしれません。

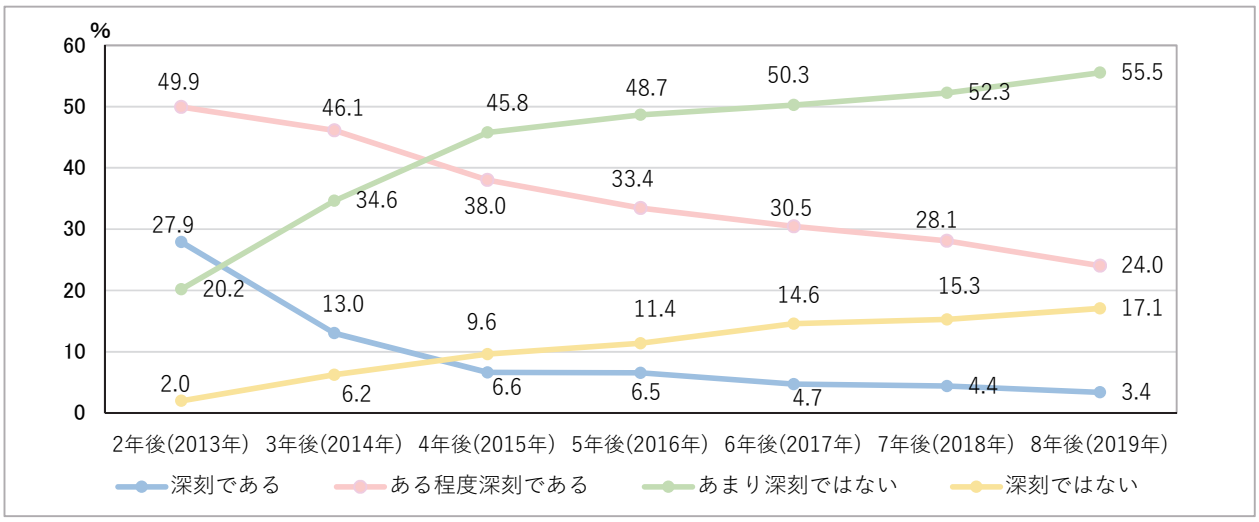


図 5-1 放射能汚染の深刻度

5.2 放射能に関する情報源は「テレビ」が中心

放射能に関して参考にしている情報源を複数あげてもらったところ、テレビが 76.5%で最も多く、次いで、役所・保健所・医療機関（58.3%）、インターネット（49.2%）新聞（48.9%）でした。

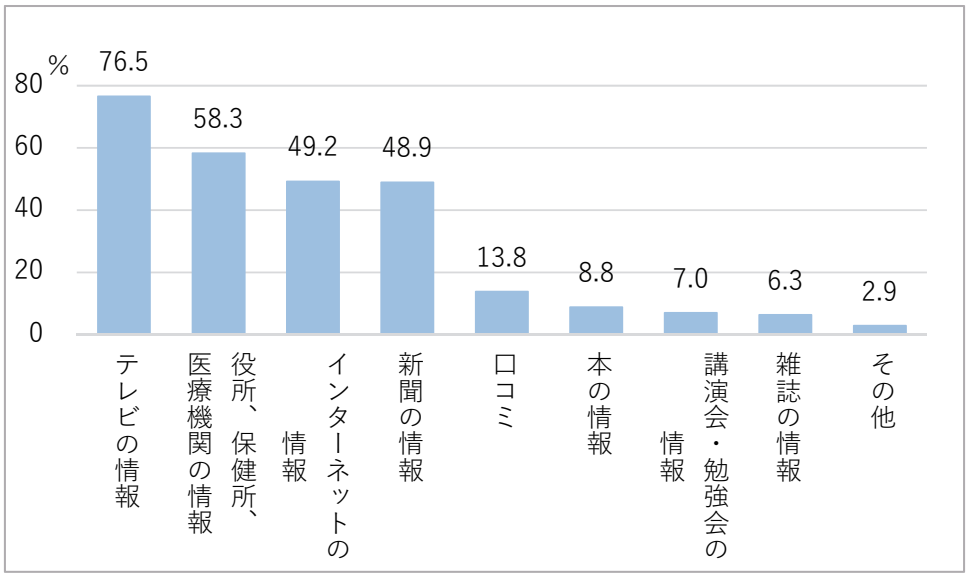


図 5-2 放射能に関する情報源

5.3　「補償不公平感」「情報不安」「いじめ・差別不安」が高止まり

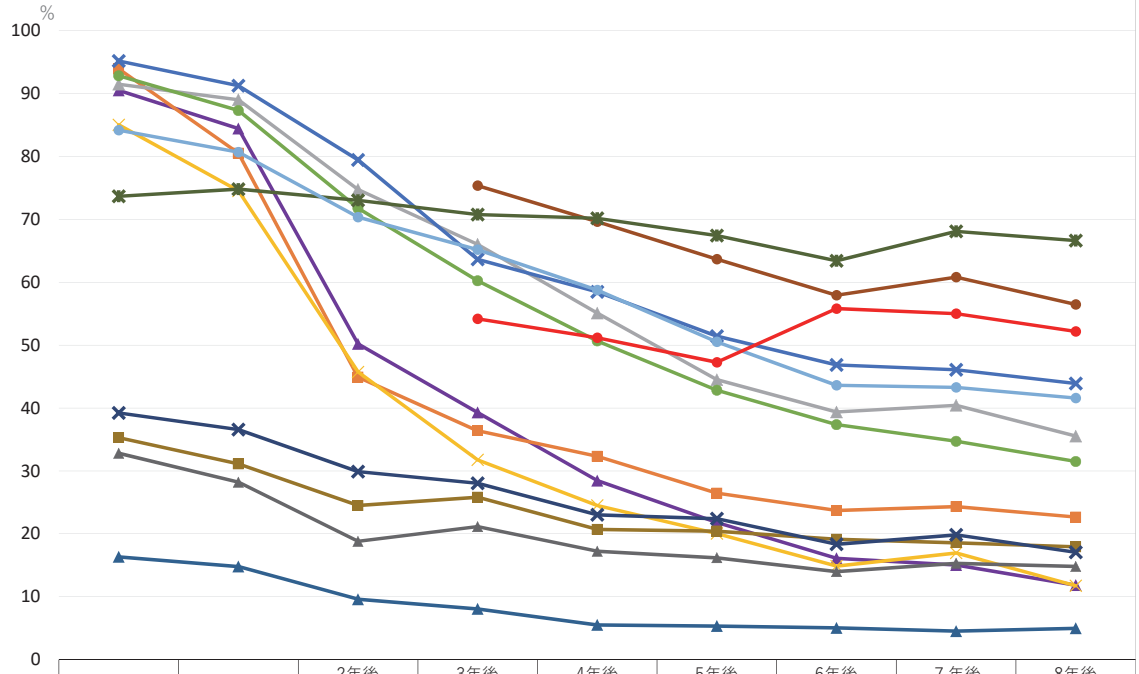
原発事故後の生活変化には 4 つの傾向が確認できます。

1 つめは、事故から 8 年近く経過した時点で、5 割以上が「あてはまる」（「どちらかといえばあてはまる」を含む。以下同様）と回答し、高止まり傾向が続いています。その項目は、「補償をめぐる不公平感」「放射能の情報に関する不安」「いじめや差別への不安）の三つです。

2 つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも約 4 割の方が「あてはまる」と回答している項目（「健康影響への不安」「経済的負担感」「保養への意欲」「子育てへの不安」）です。

3 つめは、「あてはまる」が急激に減少し、その後、横ばいとなっている項目（「地元産の食材を使用しない」「洗濯物の外干しをしない」「避難願望」）です。

4 つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目（「放射能への対処をめぐって配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」）です。



	事故直後	事故後半年	2年後（2013年）	3年後（2014年）	4年後（2015年）	5年後（2016年）	6年後（2017年）	7 年後（2018年）	8年後（2019年）
地元産の食材を使用しない	90.5	84.5	50.2	39.3	28.5	21.8	16.1	15.0	11.8
洗濯物の外干ししない	93.9	80.5	44.9	36.4	32.3	26.5	23.7	24.3	22.7
保養への意欲	91.5	89.0	74.8	66.0	55.1	44.5	39.4	40.4	35.5
避難願望	85.0	74.5	45.7	31.8	24.5	20.0	14.9	17.0	11.7
健康影響の不安	95.2	91.3	79.5	63.7	58.5	51.4	46.9	46.1	43.9
子育ての不安	92.9	87.3	71.8	60.3	50.7	42.8	37.4	34.7	31.5
親子関係が不安定	16.3	14.8	9.6	8.1	5.5	5.3	5.0	4.5	5.0
情報不安				75.4	69.6	63.7	57.9	60.8	56.5
配偶者との認識のずれ	32.8	28.2	18.8	21.1	17.2	16.2	14.0	15.3	14.8
両親との認識のずれ	35.3	31.1	24.5	25.8	20.7	20.4	19.1	18.6	17.9
周囲との認識のずれ	39.2	36.6	29.9	28.0	23.0	22.4	18.3	19.8	17.1
補償の不公平感	73.7	74.8	73.0	70.8	70.2	67.4	63.4	68.1	66.6
経済的負担	84.2	80.7	70.4	65.2	58.8	50.5	43.6	43.3	41.6
いじめや差別への不安				54.2	51.2	47.3	55.8	55.0	52.2

図　5-3　原発事故後の生活変化

＊「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」の割合

5.4　4 割以上が「子どもの将来」の健康と心への影響を懸念

すべての項目において、年々、その割合が低下しているものの、子どもの将来の健康と心への影響は、依然として 4 割以上の方が懸念していることがわかりました。

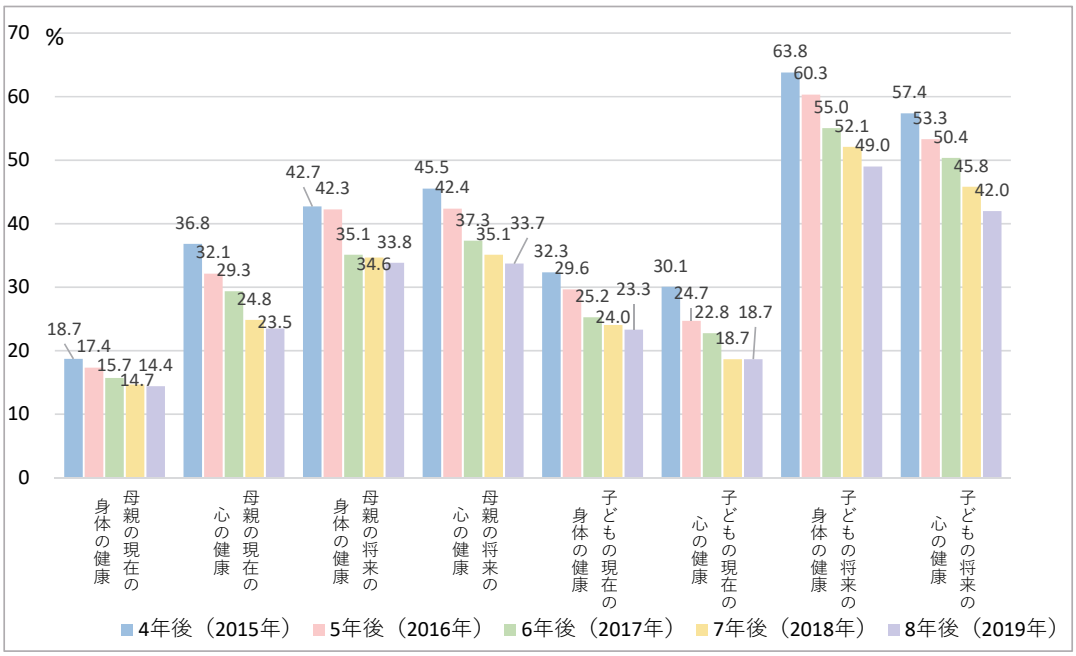


図　5-4　健康に対する放射能の影響度

＊「影響がある」＋「少し影響がある」

5.5　保養に「出かけていない」方が増加する一方、一定割合の方は「よく出かける」

2017 年から「出かけていない」という回答が最も多くなり、その割合は増え続けています。ただ、「よく出かける」方も割合は少ないものの、一定の割合で推移しています。

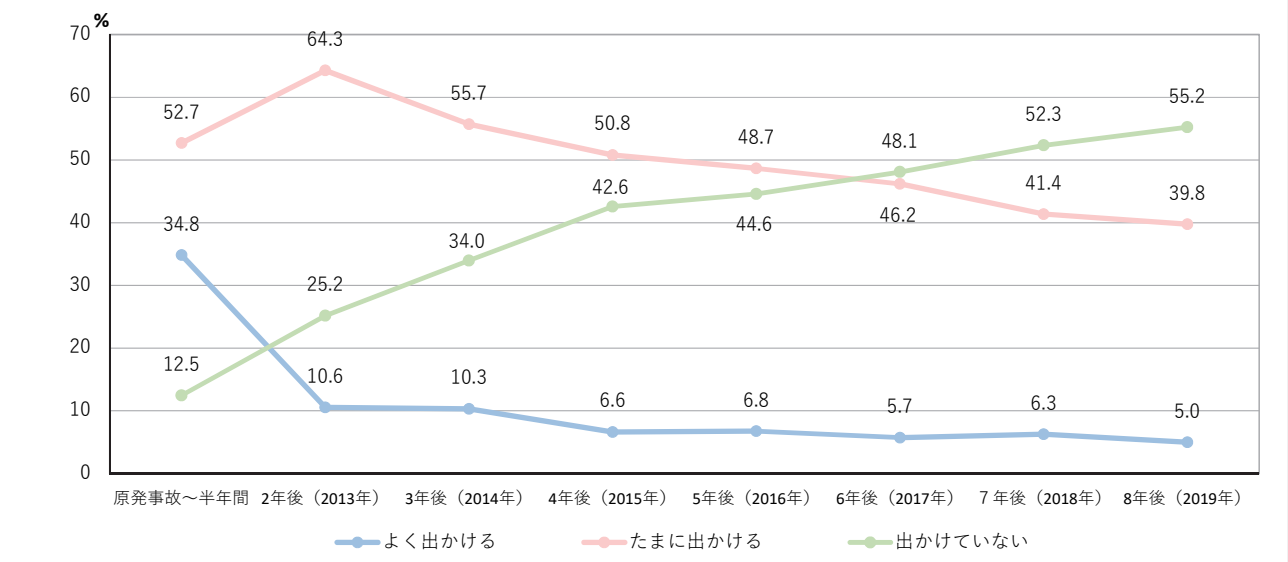


図　5-5　保養の頻度

5.6　「モニタリングポストの撤去」については、6 割以上が反対の意見

モニタリングポストの撤去については、「どちらかといえば反対」と「反対」を合計すると 66.3%となり、6 割以上が反対であることがわかりました。

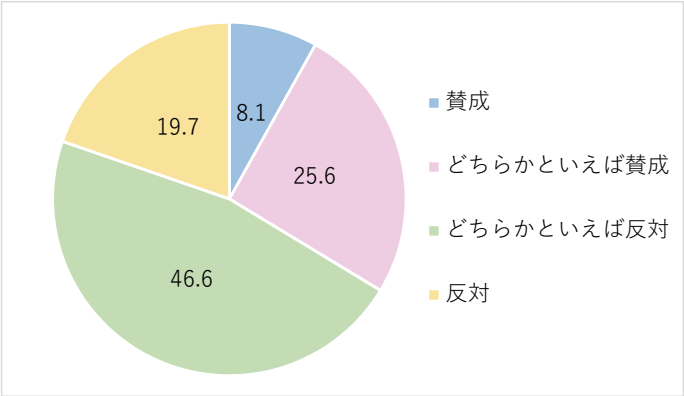
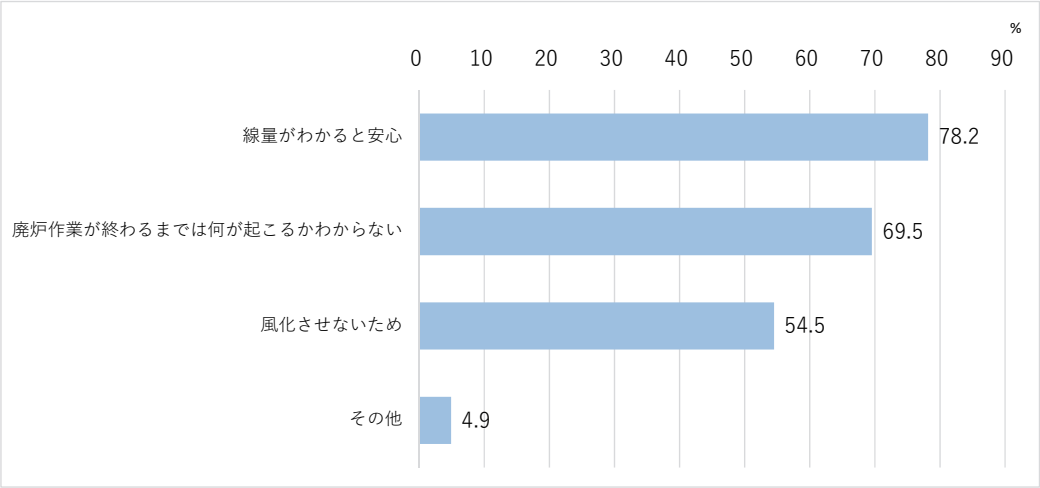


図 5-6　モニタリングポストの撤去方針に対する意見

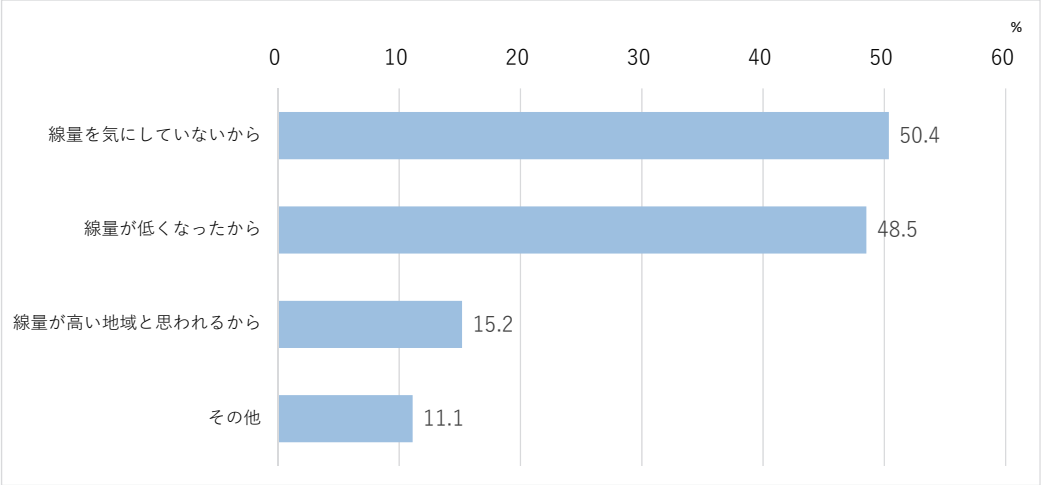
撤去に反対の理由（重複回答）



その他の理由

「唯一目に見える情報だから。TV やネットの数値は信用できないから」（5 人）
「撤去することで終わったと思われてしまう」（5 人）
「線量を意識しながら生活する権利がある」（4 人）
「国や東京電力の義務だと思う。責任を感じていてほしい」（2 人）
「県外の人に安心が伝わるから」「まだ原発事故は終わっていないから」（各 2 人）
「撤去にお金がかかるから」「線量が戻っていないのに、なくしてはいけない」
「子どもたちの将来の為にも必要」「公園や公的機関には残すべき」（各 1 人）

撤去に賛成の理由（重複回答）



その他の理由

「維持費が大きいから。そのお金（税金）をもっと他のこと（子育て支援など）に使ってほしいと思う」（8 人）

「数値に変化がないから。」（7 人）

「除染後の線量なら、モニタリングする意味がない。」（7 人）

「設置してあっても正確かどうかわからない。目安にしていいのかわからない。」（3 人）「線量数値が出ていても、どうすることもできないから」（2 人）

「じゃま。目障り」（2 人）

「整地されて草などもなにもないので、本当の数値が出ていないと思う」（1 人）

「もう誰も見ていないから」（1 人）

5.7　市町村と福島県への評価は徐々に改善、東電は 2 割止まり

原発事故後の取り組みについては、「市町村」「福島県」は 6 割近い方に評価されています。一方、「東京電力」については 2 割程度の評価にとどまっています。

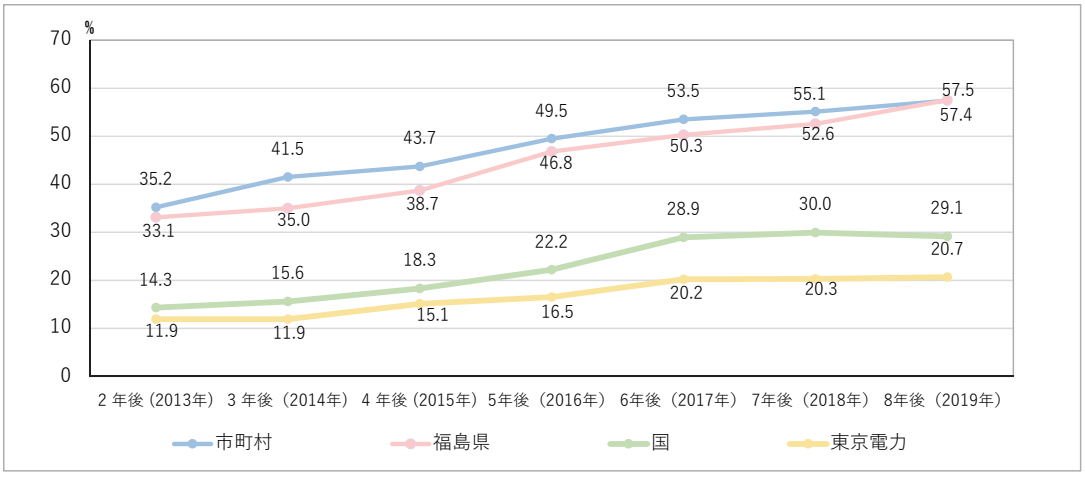


図　5-7　行政と東京電力への評価

＊ 事故後の取り組みを「評価する」＋「ある程度評価する」の割合

5.8　3 割近くの方が居住地域で原発事故や放射能について「話題にしにくい」

3 割近くの方が、原発事故や放射能について話題にしにくいと感じています（「感じる」＋「どちらかといえば感じる」の割合）。

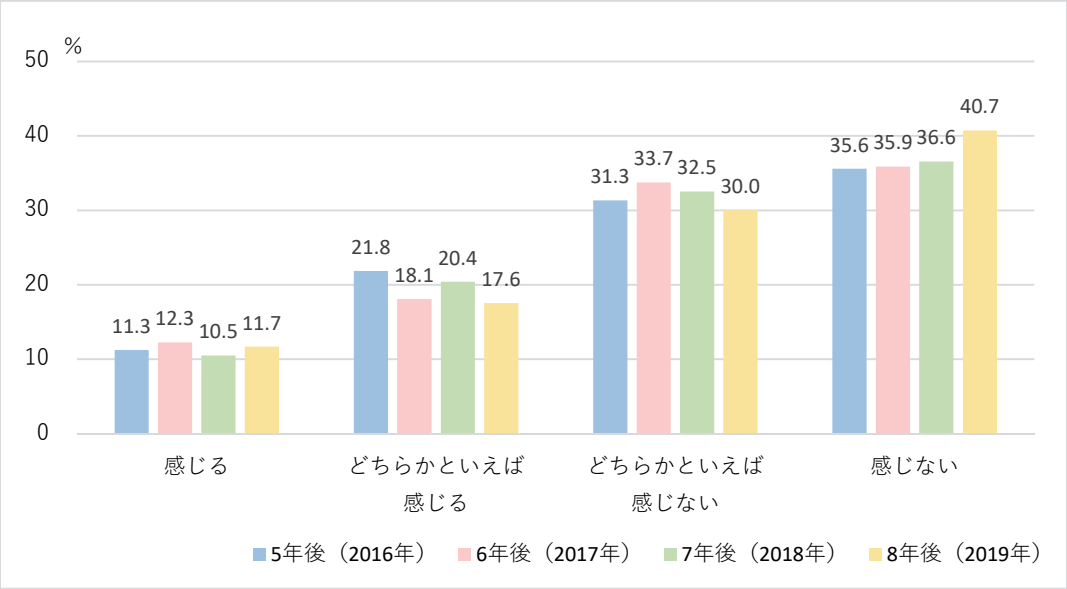


図　5-8　原発事故や放射能について話題にしにくい

5.9　居住地域で 9 割近くの方が原発事故の風化を「感じる」と回答している

風化を感じるという方の割合は年々増加しています。「感じる」と「どちらかといえば感じる」を合計すると、87.7%と 9 割近くに達します。

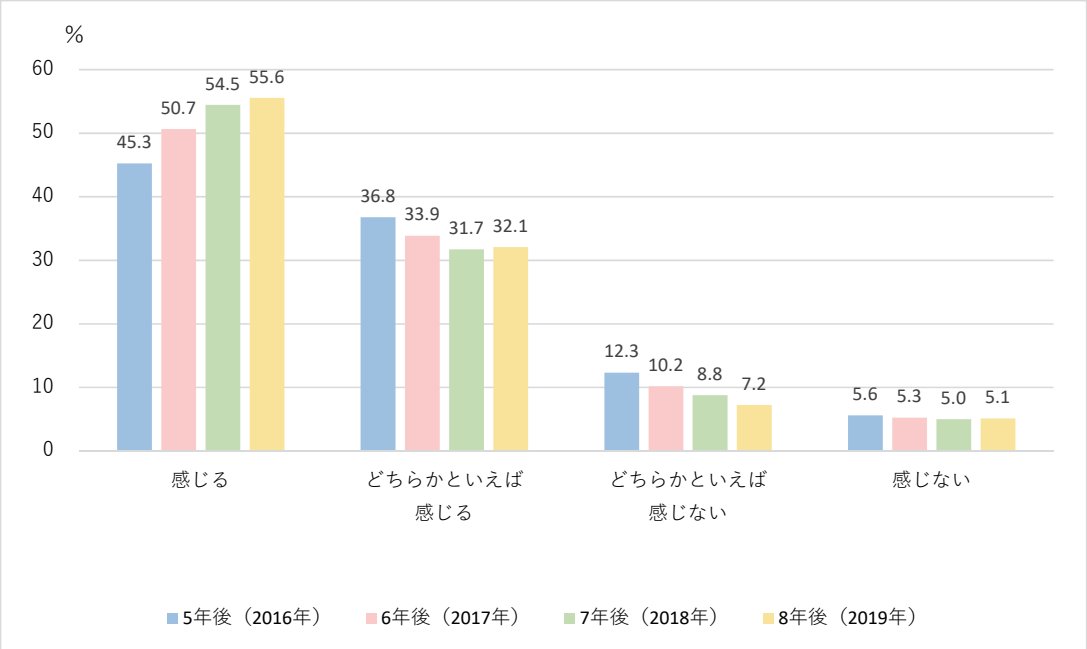


図　5-9　原発事故の風化

6 地域とのかかわりと居住意識

6.1 地域とのかかわりが強い

8 割以上の方が「親子会・PTA」に、7 割以上が「地区会・町内会・自治会」に加入しており、地域とのかかわりが強まっていることがわかりました。また、「趣味・娯楽・スポーツなどの団体」への加入が年々増加し、子どもの成長による地域とのかかわりの変化がみられます。

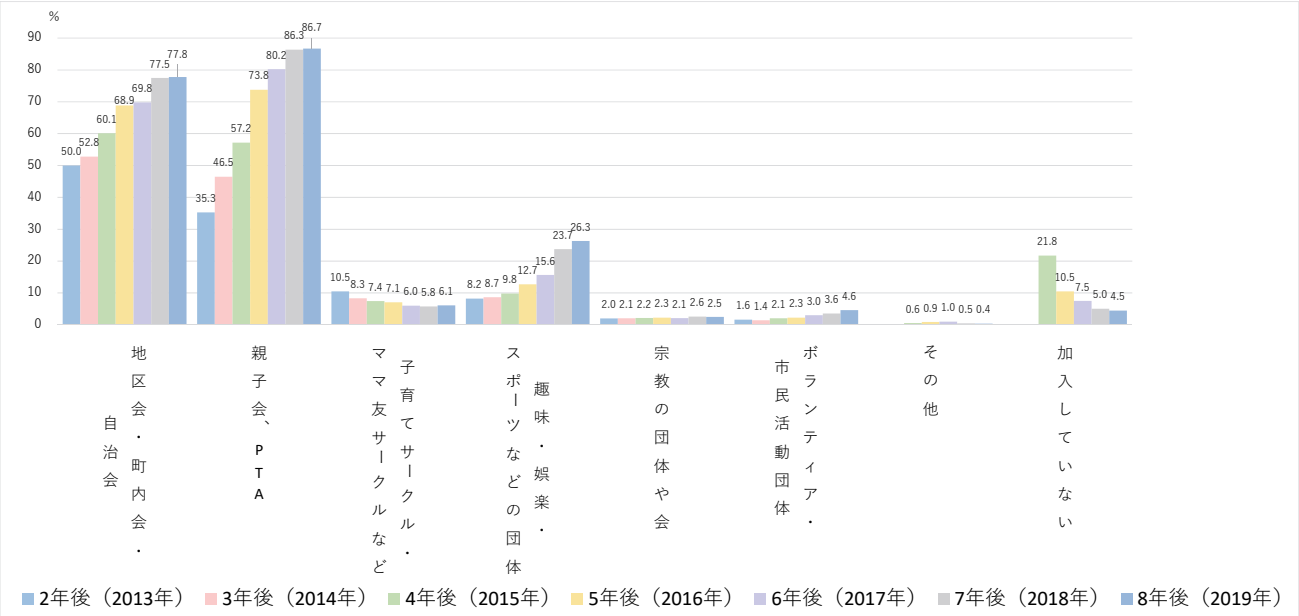


図 6-1 加入している団体・組織

＊「その他」と「加入していない」は第 3 回からの調査のみ

6.2 居住意思は「住み続けたい」が圧倒的に多い

現在の地域での居住意思では、「ずっと住み続けたい」という回答が 2015 年から 5 割を超え、2018 年からは 6 割近くに達しています。

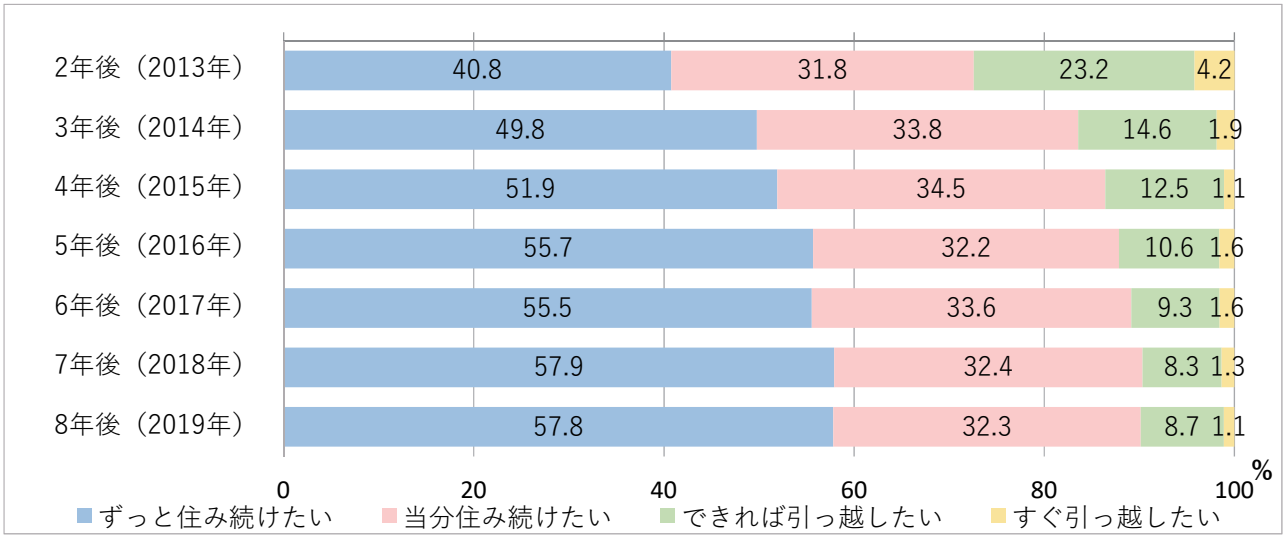


図 6-2 現在の地域での居住意思

6.3　地元への愛着、誇り、人間関係の良さなど肯定的な回答が多い

「この地域が好きである」「近所同士の仲はうまくいっている」「自分のまちだと感じる」と回答した人の割合が 2017 年以降 8 割を超え、地元への愛着が事故以前の値とほぼ同等になってきていることがわかります。一方、「近所の人は互いに緊密な関係である」に関しては、一貫して 5 割前後を示しており、近所づきあいについて適度な距離を保って生活している様子がうかがえます。

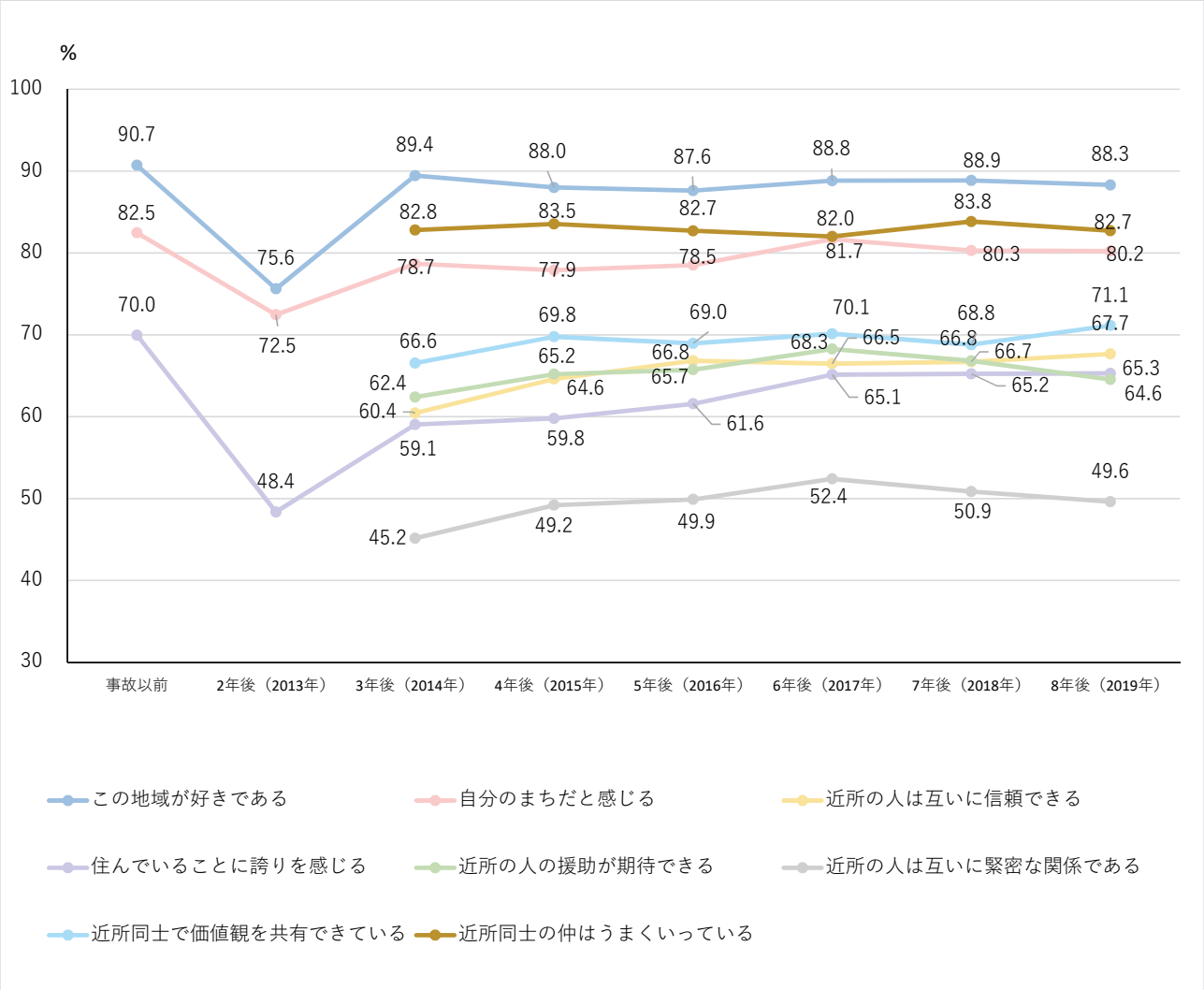


図　6-3　地域への愛着や人間関係の良さ

＊「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」の割合

注）「この地域が好きである」「自分のまちだと感じる」「住んでいることを誇りに感じる」以外の 5 項目は、3 年後（2014 年）の調査から設問に追加しました。

7 回答者の特性

子どもとの続柄

	n=	母	父	祖母	祖父	その他
2019 年調査	805	769(95.5)	34(4.2)	2(0.2)	0(0)	0(0)

母親の婚姻状況

	n=	既婚（有配偶者）	既婚（離・死別）	未婚
2019 年調査	768	708(92.2)	53(6.9)	7(0.9)

（未回答 1）

母親の年齢構成

	n=	～29 歳	30～34 歳	35～39 歳	40～44 歳	45 歳～
2019 年調査	768	4(0.5)	62(8.1)	248(32.3)	287(37.4)	167(21.7)

（未回答 1）

8 自由回答欄の声

自由回答欄には多くの意見が寄せられました。これまでの調査の自由回答記入数は以下の通りです。今回の第 7 回調査の自由回答については、18 項目に分けて紹介します。数字は、「福島子ども健康プロジェクト」事務局で読んで数えた意見数です。ただし、分類項目の間には重複を含んでいます。

	回答総数 (2019/3/31 時点)	自由回答記入数	記入率	文字数	一人当たり文字数
第 1 回調査	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第 2 回調査	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第 3 回調査	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第 4 回調査	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第 5 回調査	912	549	60.2%	100,690	183.4
第 6 回調査	832	451	54.2%	82,812	183.6
第 7 回調査	805	440	54.7%	84,872	192.9

自由回答分類	言及した自由回答の数		
	第 5 回調査	第 6 回調査	第 7 回調査
子どもの将来の健康不安・補償不安	109	89	97
風化を感じる	105	71	83
賠償金不満	64	52	71
放射線量・土壌・食料への不安	53	62	57
生活が元に戻ってきている	51	40	53
差別不安	162	50	44
甲状腺検査	27	18	35
国、福島県、市町村、東電の対応	37	34	35
現在の健康	—	15	31
事故を思い出す	—	15	29
情報不安	13	26	28
風評不安	19	15	24
地震への不安	46	7	22
避難と帰還をめぐる思い	13	16	18
保養	—	11	18
モニタリングポスト	—	—	17
家族、友人、知人との不和や葛藤	—	—	15
原発への否定的な意見	14	20	9

子どもの 将来の 健康不安・ 補償不安 97 件 今は健康でも 将来は健康か という不安 何かあった ときに補償は あるのか という不安	少し熱を出しても続くと、大きな病気などではないかなど、常に不安を抱えている。絶対大丈夫は言えないので、とにかく大きな病気なく成長してほしい。私たちも願うばかりです。福島に住んでいたことで、何かあった、ごめんなさいとは言うことがないように、願うことしかできません。
	将来、本当に影響はないという保障も感じられなく（実際に今までにないのでしかたないのは分かっていますが）、将来何かあったとき、自分が福島に住んでいたせいか、などと後悔するのではないか、と思うことがあります。
	原発事故から 8 年も経ちますが、子どもたちの健康状態が心配でならない。今は大丈夫でも来年はどうか？？など思ってしまう。事故後の補償を考えると、不公平感があるが、もし子どもがガン（甲状腺などの）になったとしたら医療費を無料にするなど対応してほしい。
	非常に身近に、放射能の影響なのでは？と思わされる出来事があり、そう遠くない将来、わが子にも何か異常が見つかってもおかしくないのかもと、少し不安になっています。今になっての避難や食事制限などはあまり意味がないとは思っていますが、ここにきて、子どもたちへの放射能の影響は思っているより早く、低くはない確率であらわれるのではないかなと思っています。
	周りの知人でも体調不良の方が多く、子どもたちにも成長していくにつれて、色々な症状が出るのでは…と不安です。しかも、「原発事故との因果関係はない」と言われてしまうのが目に見えているので、不安はさらに大きいです。

風化を感じる 83 件 原発事故 を忘れている	だんだん風化していると思います。どうしたら風化しないのでしょう？何事もなかったかのように毎日過ごしています。本当は大変なことがあったのに。
	福島原発事故による放射能の影響についてあまり心配することがなくなりましたが、実際はどうか（放射能の影響）正確な情報を得る努力はしていません。福島に住んでいるにも関わらず、私の中で風化傾向にあり反省することもあります。
	TV などはほとんど報道もなくなりました。節目（～11 日）、震災・事故から～ヶ月・半年などのときぐらいしか見ません。原発の廃炉に向けての内容や、汚染物質除去の内容に少し触れるぐらいです。生活の中では話題に上ることも少なくなり、今現在の生活が昔からあったかのような感じです。同じ意識を持っている人としか話すこともありません。自分自身も忘れてきてしまった部分とそうでない部分とがあり、複雑な気持ちです。
	震災を忘れることはないが、特に意識することもない。原発事故による身体への影響はまずないと考えており、最近は身の周りで話題になることもほとんどない。
	小学校では毎月 11 日、集会や避難訓練をしておりました。しかし今年度は、ほとんどやっておりません。時間が経つというのはこういうことなのだなと感じます。

賠償金不満 71 件 賠償金の金額 や対象への不 満	もう 8 年たつのに、避難している方々は補償（お金）をあてにしているのか、自立していないように感じます。働かずにパチンコに行ったり、ウロウロしています。8 年の間、生活再建のために時間や補償（お金）を使っていれば、働かずにのほほーんとしている人、もっと減ってるんじゃないのかなと感じます。そんな現況をよく把握して、そろそろ補償（お金）やめたらいいのでは、と思います。

	8 年の間に全国各地でいろいろな災害があり、福島だけが大変ではないと思っています。補償に関してはかなり不公平があると思います。そしていろいろ騒ぐのは、手厚い補償をいただいている方々でしょうかね。本当に困っている方には手厚くないような気がします。言って騒いだもの勝ちみたいなところが嫌です。
	被災されて転居して来られた方で新しい家を建てて、新しい車を買って、毎日免除されて病院で受診されている方を見るとがっかりしますね。もっと困っている人が世の中にはいるのに…。
	空き部屋の多い復興住宅に疑問を感じたり、いつまでも賠償金で生活（賠償金をあてにしている人）を見たり聞いたりすると、不公平に感じることがある。賠償金をもらっていることをいつまでも自慢げに会話に入れてきたりすると、いつまでもらい続けていくのかと思ってしまう。いいかげん、国も打ち切りにしてほしい。いつまでも払い続けて、このしわよせが自分の子どもたちにおそいかかってくるのかと思うと子どもたちがかわいそうに感じる。
	8 年経っても、補償をめぐっての不公平は消えません！！市民税、土地代、全て高くなっているし、どうして福島市民がこんなに苦しい思いをしなきゃいけないのか？！子どもたちだけでも何かしら補償をしてもらい、いつまでもここ（福島）にいたい！と思わせる将来にしていきたいです！！私も子どもも福島が大好きです！！子どもの子どもの子ども…とつなげていきたいです。

放射線量・土壌・食料への不安 57 件 空間線量 除染土 地元の食料への不安	このあいだ県が主催したスタンプラリーに子どもたちと出掛けました。スタンプラリーの指定地域に第一原発のすぐそばの地域があり、スタンプのコンプリートを子どもたちが目指しておりましたので、渋々連れていきました。町には車も走っておらず、わずかな人は全て原発関係の方たちばかりで、ものものしい雰囲気でした。おそらく、もう人が住んでもよい状態なのだとは思いますが、実際に戻っている人はいなく、（県）主催側と参加者側の感じ方に大きな差がありました。本当は行かせたくありませんでした。万が一、将来ガンになったときに「あの時行かなければなっていなかったかもしれない」という後悔をしたくないからです。少なからずそのような思いは他県の方に比べ、福島県民はもっているのでは、と思います。
	今、学校の校庭に一時的に埋めておいた汚染土を掘り出しています。事故さえなければこんな工事をする必要はなかったのにな…、子どもたちが校庭を使えず不自由な思いをしなくてよかったのにな…と思います。いまだに、山に生えているキノコ、タケノコなど食べられないものがあったりすると、自然豊かで食べ物がおいしいのが自慢の福島だったのに残念だな…と思います。
	私の中では、外で長時間何かをさせるのは気持ちよくないというのが本音です。絶対ということはないと思っています。だから、今も、これからも子どもたちのためにできることを優先してやっていこうと思っています。
	当時 2 才 4 ヵ月だった息子も 10 才になり、大人社会のいろいろな事柄に関心を示すようになってきました。PM7 時のニュース(NHK)前、天気予報の後に流れる放射線量の数値を毎日チェックし、家の柿で作った干し柿は食べても大丈夫かと聞いてきたりと、“放射線を気にする生活”が“当たり前の日常”になっています。10 才の子どもがです。原発事故は過去のことではなく、終わりの見えない事故です。
	震災から続けている、洗濯物を外に干さないことやミネラルウォーターの使用、食物の産地を選ぶ、ホットスポットになりそうな場所にはなるべく近づかないこと等は私にとって生活の一部となっており、あまり考えずとも自然と行動しています。しかし、子ども達はその当時は意識し

	ていた行動（ホットスポットになりそうな場所には近づかない）が薄れており、時折話題にして教育していく必要性を感じています。

生活がもとに戻ってきている 53 件 震災前と変わらない生活に戻っているあるいは戻りつつある	3 月 11 日がくると、毎年その季節になったのだと思うが、それ以外の日は普通の生活を送っている。
	普段の生活において、震災とその影響に関することを考えたりすることはほぼなくなってきました。テレビ、新聞等で「震災から 7 年○○ヵ月」とか、「今日は震災の月命日です」と報道された時にふと思い出す程度です。
	生活は、原発事故前と同じ状況になっています。不安は全くありません。小学校の外遊びや、体育の授業、運動会も、以前と同じになりました。娘は 10 才なので、自分のやりたいように時間を過ごしています。親子で一緒に何かをする時間が減り、友達とよく遊ぶようになりました。3 才の息子と近くの公園に遊びに行くと、多くの子ども達が公園の遊具で遊んでいます。子ども達の元気な姿を見ると、心が明るくなります。
	東日本大震災から 8 年経った今、3.11 の日には「こんなことがあったね。」と思い出しますが、普段の生活に戻っているように感じます。震災時から数年間は線量計を個人で購入し、どこへ行くにも持参し線量を測っていましたが、今はそれもなく、学校から希望で支給される線量計も子どもたちに持たせることもなくなりました。不安というものはほぼなくなり、震災前の安心した生活を送っています。震災時は、放射線や余震、そして小さい子どもを二人抱えて、とても神経質になっていましたが、ほぼ不安もなくなり、親も子ものびのびと生活しています。
	原発事故から 8 年経過し、息子（長男）も小学校を無事卒業できそうです。思えば、ここまで来られたことが、本当に感謝しかないです。息子は原発事故当時、外で遊べず、地震速報をまねした遊びなどをしていました。そのうちに、学校の除染が進み、また先生方のきめ細かい指導により、本来の子どもらしさをとりもどし、楽しい小学校生活を送ることができました。将来、ガンになる不安はないわけではありませんが、今、子どもたちの心が病気になるような不安はありません。外でたくさん遊ぶ子どもたちは輝いています。

差別不安 44 件 県外からの福島出身者への差別に対する不安	子どもが大きくなってから出会う人が、子どもが震災時福島に住んでいたことや、甲状腺の検査を定期的に受けていることを知ったとき、どう思われるのか。子どもが傷つかないようにどうにかできないのかと思います。引越しが多いので、実家が福島であることを伝えると、相手が固まった表情をしたり、「戻りたくないよね」等のことを言われると、すごく心が痛みます。
	福島に住んでいたことで、将来差別を子ども達が受けるのではと考えると悩む。福島から避難して、いじめを受けた子ども達もいる。子ども達のいじめには大人の責任もあると思う。色々な考えがあることも分かるが、差別、いじめが起きないように願っています。
	未だに福島から他県へ転校すると「ばいきん！！」扱いされいじめを受けている子どもたちが実際に多いことにがっかりしています。覚悟を決めて家族で福島にいると決めた私たちですが、それが間違いだと思いたくないです。子どもの未来を、そして子どもの心を守ってほしいです。
	将来、子どもが県外に住んだとしたら…という不安だけがあります。いじめられることの不安です。県内の方は、同じ思いの方もそうでない方もいますが、県外だと大半が福島県を嫌がるのではないかと感じます。
	福島から離れたくても子どもへのいじめなどが心配で、福島を出ることができません。

甲状腺検査 35 件 検査の結果や体制に対する不安	甲状腺検査についても、今まで検査数が少なかったものが増えることにより、異常が見つかる件数が増えるのも当たり前で、「数が多い」＝「放射能による影響」と一般の人は思いがちです。異常が多いことが取り上げられがちですが、放射能による影響との因果関係についてはこれからもっともっと調査が必要で、メディアもきちんと数字の奥に隠れている本質を全国に伝えることが義務なのではないかと思います。
	今回、子どもが検査を受け、のう胞があった。それと事故とは関係がわからないというが、ならなぜ検査をしているの？本当に関係がなくとも信用できない。
	ホールボディカウンターと甲状腺検査はまだ続けていますが、今後どうするか悩みます。通知が来ると、受けさせないのは親としての義務を果たしていないように感じ、不必要と思いながらも受けさせています。当時、避難する人もいた中で、福島に残り、将来も何か影響が出るかも知れないという少しの不安の中で生活させていることに対しての罪滅ぼしのような気持ちもあります。
	放射線量測定や、甲状腺検査、どきどきするので、任意とはいえできればもうやめてほしいです。
	甲状腺検査などは、将来子どもに「ちゃんと検査したよ」と言いたいので、全く異常がないとわかっていても受けさせたいと思っている。

国・県市町村・東電の対応 35 件 原発事故時とその後の対応への意見	風評被害が徐々に減ってきていると感じるが、近所や県内の放射線（除染）に対する作業や事業の公開がなおざりにされていると感じている。安部首相が、まだまだ原発被害が大問題になっているさなかに、オリンピック招致のためにぬけぬけと世界に向けて「すっかり改善されている。海への影響も完全におさえられている。」と言ったニュースを見たときに、こうやって嘘をはっきりとつけるこの国のいい加減さに、いまだに不信感が強い。苦しんでいる県民をさしおき、世界や日本中へ大嘘をつくことで、原発被害を過小評価し、うやむやにされることがつらい。
	震災遺構になりうる建物が壊されているが、果たしていいのか疑問に思う。1F については廃炉が決定しているが、2F について明確にしていない東電に対し、福島県民の声を真摯に受け止め決定してほしい。1F についてのニュースがかなり減っているので、逆に不安に思うことがある。汚染水の貯蔵場所が限界にきている。8 メートル以上の津波に対応できない 1F を今後どうするかの情報が入ってこない。
	はっきりと思い出せませんが、東電から原発事故に関して写真集やプリントしたものが出され、非常識だと批判されるような事があったように思います。事故を起こした会社の社員には、そういうことができる人がいるのだとがっかりしました。東電にももっと努力してほしいですし、福島自体が前に戻るように頑張るしかないと思っています。まだまだです。
	国は子ども第一に考えていないのが悲しい。子は宝。将来の日本を背負うのは子どもたちなのに、今の日本、大人たちは子どもにとって良い国を、良い環境を与えていると言えるのだろうか、と思う。他の国も大切だが、子どものことを考えてほしい。
	住宅汚染について東電に申立てをしたところ、事故から 8 年も経とうとしているので、食材、洗濯物、住環境について心配するのは考えすぎ、心配しすぎ、必要なことではない、というような返答が来ました。置かれた環境もそれぞれですし、感じ方もそれぞれです。なのに年数や数値をもとに心配はいらない、と言われても安心できることではありません。今回のような事故はかつて経験のないことでしょう。それなのに何をもって大丈夫、心配ないと言うのでしょう。今後の子どもの成長に心配はやはり感じます。問題なく親になって子どもを持ち、健康に過ごしていくことができるのでしょうか？未知の世界ではないのでしょうか？個々

	の気持ちをくんでほしいです。そして、モニタリングポスト、個人線量計、次々に打ち切りとなっていくのではないかと不安です。不安を抱える人がいるのであれば、それを取り除く為に策を打ち出して実施していくのは加害者東電の責任なのではないでしょうか？

現在の健康 31 件 子どもの現在の健康状態 母親の精神面での不調	8 年が経ち、変わらず身体的な不安は残ります。息子が小 4 になり、サッカーのスポ少に入るなど、外で体を動かす機会が増えてきています。が、同時に体力、運動能力の低下もはっきりしてきており、「小さい頃にもっと戸外で思いきり体を動かす経験ができていたら、この悩みはもっと小さかったかな…」と感じたりしています。「伸びる時期に必要な経験をさせてあげられなかったのかな…」と。そういった意味ではもう原発事故の影響はとても大きく出ています。
	長子に比べると末子世代は（同じ年齢の頃で比べると）できないことが多いように思える。（幼稚園でのおゆうぎなど。運動能力も。）2 才頃に震災が起き、その後外遊び等の機会が少なかったからかな、とか思ってしまう。我が家の末子は元々不安が強い性格もあり、今でも少しの地震でもとても怖がります。当時の記憶はないようですが（本人に聞いたら覚えていなかった）「怖かった」という感覚はとても残っているように思います。
	震災前よりイライラが増している。子どもに前より当たっているように感じる。
	今頃になってのどが変だ。甲状腺の検査をしてみたいが、もう無理だろうか？
	会社の甲状腺検査で異常が見つかり、現在経過観察中ですが、原発事故が原因なのか分かっていません。今後も不安です。（腺腫様甲状腺腫）

事故を思い出す 29 件 忘れることができない当時の記憶	8 年近く経ち、私がとてもかわいがっていた甥っ子が成人式を迎えました。8 年前を思い出すと、今でも涙が出ます。甥っ子の小学校の卒業を楽しみにしていたあの頃の気持ち。すぐ、県外へ避難したどうしようもなく不安で辛かった気持ち。全て思い出します。成人式の日、TV で見るのは、やはり震災の時卒業式をできなかった子ども達が 20 歳になった…とのナレーションと映像でした。涙ばかり流れました。健康でいられるよう祈るばかりです。
	当時 2 歳だった長女が小学 4 年生、お腹の中にいた長男が小学 1 年生になりました。でも、鮮明に覚えています。震災の日のこと。当時、私は車を運転していました。波打つような道路でした。実際それを見て、体験しているのに、夢をみているのか？と思うほど衝撃的な光景でした。
	8 年たっても、事故発覚のときの恐怖、自主避難中の孤独感、福島に戻る月半分は子どもと軟禁状態の閉塞感、記憶の中に全く薄れることなく存在しています。つらいつらい耐えるばかりの嫌な記憶。私自身はちょっとした事情で県外に住民票があるので、何一つ補償もありませんでした。東京電力からは、まるで金目当てみたいな扱いで、それも心をズタズタにしてくれました。なかなか薄れませんね。
	TV でやっていると別のチャンネルにかえたくなる。そのときのことを考えるとドキドキ、ドクドクするのを感じる。子どもはいったい何があったのかわからないようだ。私も説明は難しい。自分もわかっていない。
	今年は震災関連のテレビを見ることもなく、自分ではもう興味がないんだと思っていました。でも、原発事故が起こった日のことをテレビでたまたま目にしたとき、胸がしめつけられました。水素爆発の映像を見て、息が苦しくなりました。やっぱり忘れてはいませんでした。一瞬であの日が甦り、強いストレスを与える…憎き原発。

情報不安 28 件 情報の内容、格差に対する不安	10 月に郡山でたらちね主催の講演会（タイトルは「長寿命放射性元素体内取込み症候群とトリチウムの危険性について」）があり、参加しました。そこで講師の医師に個人的に質問したところ、原発事故後周産期の死亡率が明らかに高くなったとのデータがあることを聞きました。やっぱり、と思いました。国民に都合の悪い情報は表に出てこないのでしょうか。福島県立医大の回答と正反対のお話でした。混乱します。何の情報を信じたらよいのでしょう。
	普段は放射能のことは忘れつつありますが、時々、放射能の情報を耳にすると不安になる。1 ヶ月前くらいに、原発に近いところにいる野生の日本ザルの発育状態が悪いことがわかったとネットニュースで見て、心配になりました。
	廃炉作業がどこまで進んで、今どんな状況になっているのか、まったくといっていいほど情報が入ってこないのが複雑な気持ちです。地元（郡山）に帰ると、何も変わらず、県外ではまったく気にされていない。事故があったことがなかったようで不安になる。もう少し先が見えないと、終の住処として帰れません。親も、多くの友人もいますが、今の場所に根をおろすかと、子どもの様子を見つつ未だに考え中…放浪者です。
	8 年が経過しようとしているが、年月とともに以前のような事故のニュースは減り、作業の様子や状態などの報道も少ない。安心、安全に生活出来ているかといえば、たまに報道されるニュースだけが頼りになっている。正しい報道を希望したいと思う。「隠す」報道や「過剰」な報道で不安になるのは、実際にここで生活している私たちに他ならない。現実をしっかりと受け入れ生活している私たちを忘れないでほしい。この子らが育つ環境は誰も経験しているわけではなく、健康や寿命も人生も未知である。大切に子どもらの命と向き合い、離れられない土地で仕方なく折り合いをつけ生きている。命の保障、安全という面では、親の私ですら確実なところで「大丈夫」とは言えない不安とたたかっている。
	現在、福島原発がどういう状況か、実際ぜんぜんわからない。

風評不安 24 件 福島の人・物に対する風評への不安	仕事で県外に東北の方々が集まる機会があったが、「かわいそう。」とか「がんばって。」とか言われました。少々気分を害しました。
	福島県内にいる分には、特に風評被害は感じないが、ネット、テレビ等では、やはりまだ差別化を感じる。
	子どもの年齢がだんだん思春期になることと、夫の転勤が他県になることがあり、異動先での『福島』に対する考え方がどうなのか、心配になっています。
	勤務先の食品会社での風評被害。日本国内でも、依然として福島県で生産された食品は購入したくないという声が寄せられるときがある。また中国など、福島近県からの食品の輸入が禁止されている国があり、原発事故前にあった輸出の出荷が、未だにできずにいる（数億円/年の販売が止まっている）。
	住んでいる私たちにとって放射能はもう不安なものではなくなってきていると思いますが、他の地域から見ると住むべき場所ではないのでしょうか？テレビの全国放送などで取り上げられると、少し温度差を感じます。

地震への不安 22 件	生活は少しずつおちついてきていますが、地震があると過度にこわくなり、その後、原発は大丈夫だったかなと情報を集めてしまいます。
	最近日本中で地震が起きているため、いつか福島でもまた大きな地震がくるのでは…と不安です。職場でもよく話が出ます。何かあったらどこに逃げようか…。安全な場所、国はあるのか…。夫と時々話します。そ

また大きな地震が起きたらという不安	ろそろいざというときの準備もしようか…など不安に思うことが増えました。日本の震災に対する対策は、きちんとできているとは思えません…。何かあったら逃げる…どこへ???
	大きめの地震があると、私はすぐに福島原発は大丈夫なのかは心配になります。ダメージが修復されないまま、再び大きな地震が来た時は、今度こそ逃げ切れないと思っています。
	普段は忘れていますが、他の地域も含め地震が来るとびっくりして怖くなります。
	他県等で大きな地震があると、やはり気になりますし、東日本のときと比較したりしてしまいます。もう経験したくない地震です。

避難と帰還を巡る思い 18 件 原発事故をきっかけに避難されている方、戻った方の思い	子どもたちにとっては、良い選択だったと考える反面、「なぜ顔馴染みの場所で子育てできなかったのだろう？」と、何とも言えない気持ちになります。自分の中では不安もある中、帰りたいという気持ちを誰にも（夫以外）話さずここまできてしまったので、子どもたちのためにもこのままでいたほうが良いと自分に言い聞かせているような気がします。
	生活が苦しいです。でも福島へは帰れません。何事もなかったかのような雰囲気にするのはやめて、きちんと責任をとってほしいです。震災のテレビを見るとストレスに感じ、子どもに当たってしまいます。実家へ帰るとフレコンバッグの山があったり、家族が「7000 ベクレルのまつたけを食べた」とか、「イノシシの肉を食べた」とか言っていて、普通じゃないと思います。誰も分かってくれないと、孤独に感じます。
	4 月に県外から戻ってきました。地元に戻れたのに、子どもの学校、部活等、何もかも県外の方が優れていたことにショックを受けました。原発事故もあり、福島は心のメンテナンス等大変かと思いますが、魅力ある福島でなければ人は戻ってきません。何とか子どもたちの学習レベルを上げる努力を、教育委員会でも話し合ってほしいと思いました。やっと戻ってきたのに、悲しいです。
	昨年 12 月に福島の自宅を売却しました。とてもさみしくツライできごとでした。ですが、避難先に定住するためには乗り越えなければならない試練だったと思っています。主人は変わらず仕事のために福島市内に残り、アパート暮らしに。来月（2019 年 3 月）末で避難先のアパートの補助も終了となり、金銭的にますます大変になりそうですが、もう自宅のない福島へは帰る場所もないですし、ただひたすら前を向いて必死に生活していくしかないと感じています。

保養 18 件 保養に満足している声と、保養が減ることへの不安	保養に出かけたいが、応募しても抽選にもれてしまい、狭き門である。年々保養団体も減ってきているので仕方ないが、継続してほしいと願っている。
	保養には出たいが、子どもも成長すると長く家を空けることは難しくなり、せいぜい週末の日帰り。それも、日常生活の方が楽しく、子どもは望まない。親も、休日にフル活動で外出するのは忙しく、また、時間の経過と共に、体力、気力がついていかない。
	保養が少なくなったり、金額が大きくなってしまっている。その上に、保養に出かけているうちは、福島＝危険なところとアピールしているようなものと、郡山市内の教会関係者が広報で言っていてショックだった。昨年の夏、京都に保養に行った時に、保養の条件で、初めて子どもたちに血液検査をさせた。企画してくれた方は避難者だったので、やはり避難していない自分たちは意識が低かったのだなあと思った。
	遠く離れた地で、私たちの気持ちを受け止めてくれる人たちがいる、それは私たちの救いです。震災後私たちに必要だったのは、心のケアだったのだと思います。心配する母親たちを否定することではなく、それを受け止め他県に保養や避難をしても温かく受け入れてくれる県としての

	サポートが必要だったのだと思います。しかし、普通に生活できている今、募金で成り立っている保養、“私たちの不安な気持ち”、それだけで続けていくことはいいことなのかどうか…。

モニタリングポストに対する意見 17 件	廃棄物輸送がまだ完了していない中、モニタリングポストの撤去方針はいかがなものかと思いました。
	モニタリングポストの撤去に関しても説明会があって、反対意見が多数出ていてもこのままでは強行されてしまうのかなと思ってしまいます。
	モニタリングポストが撤去されるということだが、確かにメンテナンス費用は高いので、全てとは言わないが、線量が高いところや、いつまた何が起こるかわからないので、何ヶ所かには残してほしい。残っていれば風化も少しは防げるような気がする。観光に邪魔になる所は見えないようにしてもよいのでは（百葉箱みたいに）。
	モニタリングポストの撤去は、複雑です。あってもなくても不安…というか、これが正解と、現時点では自分で答えを出せません。
	家の目の前に公園があり、その公園にはモニタリングポストが設置してあります。初めのうちは公園に行くたびに数値を気にしていたのですが、現在は確認もしなくなりました。数値的には基準の倍以上もあるのですが気にならなくなることに、慣れは怖いなと感じます。

家族・友人・知人との不和や葛藤 15 件	今後学校教育で、放射線＝安全の教育が行われていくのだと思うと気が重いです。家庭での教育が必要なのでしょうか。でも母親と父親の間で、放射線についての考え方が違うのに（分かり合えていないのに）子どもに教えるって…。これも気が重いです。
	引越しが多いので、実家が福島であることを伝えると、相手が固まった表情をしたり、「戻りたくないよね」等のことを言われると、すごく心が痛みます。
	未だ、避難している友人や知人がおり、年賀状のやりとりをするときなど、何とも気の重い感じになります。
	避難生活が 8 年に入り…主人とのみぞを少し感じます。というか、普段いないところに毎週休み毎に来てくれてありがたい反面、いることで調子が狂いがち。別にいなくても何とかなっている現実に少々複雑な気持ちになることが増えてきました。

原発への否定意見 9 件	原発の再稼動はなくしてください。
	特に問題なく過ごしてはいますが、廃炉作業中は常に心の隅に不安があります。作業事故なんてあれば 8 年前の悪夢が再び起こるでしょうし、もし事故があっても隠蔽しているのでは、と疑いの目もあったりします。また、こんなことを経験したからか、地震大国である日本での原発自体が邪魔なものにしか思えません。想定外のことはいつ起こるかわかりません。
	世界中が自然エネルギーへと転換していく中で、日本はどうして原発をやめられないのか理解できません。失業してしまう人が増える？関係会社が倒産する？経済優先？“人の命より大切なものがある”という考えが手にとるようにわかります。日本は世界に逆行し、そして本当に大切にすべき価値観を見失っています。福島の子どもたちは学校で放射線の授業を受けて育ちます。50 年後、“原発事故が過去の事故”となり、“これから原発事故はもう起きないよ。安心して暮らせるようになってよかったね”と子どもたちに伝えていけるような、そんな社会になってほしいです。人の命より大切なものはない、そう言える実社会になってほしいです。

9 おわりに

今回の調査結果は、以下のようにまとめられます。

- お子さんの**外遊び時間は昨年に比べ減少**し、遊び方の変化と習い事等に費やす時間が増加していると考えられます。**テレビ・インターネットをみて過ごす時間は、長くなっている**ようです。
- 親御さんが**お子さんと一緒に遊ぶ機会や一緒に買い物に行く機会は、減少**していることがわかりました。お子さんが成長するにつれて家庭外での生活が広がり、親子で一緒に行動する時間が減少しているようです。
- お子さんの**適応と精神的健康**については、**女子は全国調査と比較して「正常」の割合が高く**、**男子は全国調査と比較して低い**ことがわかりました。
- お子さんの**健康状態は良好**ですが、**子どもの症状のうち最も多いのは「皮膚のかゆみ」**です。
- **お母さんの健康状態も良好**ですが、**「肩こり」「腰痛」「頭痛」が一貫して多い**ようです。
- **お母さんの心の状態はおおむね安定**しています。ただ、災害に関連した心の状態を評価する SQD では 8 年近く経過した時点でも **6 割以上の方が「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすく身体がだるい」を訴え**ています。
- **「補償の不公平感」「放射能情報に関する不安感」「いじめや差別への不安」は高いまま**です。**「健康影響への不安」も 4 割以上の方**が感じています。**地元産食材や洗濯物外干しへの抵抗感、周囲の人との認識の違いなどに悩む方も一定の割合**でいらっしゃいます。
- 「**保養**に出かけていない」方が増加する一方、「よく出かける」方も一定割合いらっしゃいます。
- **モニタリングポストの撤去については、6 割以上の方が「反対」**であることがわかりました。
- **3 割近くの方が「原発事故・放射能を話題にしにくい」といい、9 割近くの方が「原発事故の風化」**を感じています。
- **「地域への愛着」や「現在の地域での居住意思」**については、**9 割近くの方が肯定的**です。

時間の経過とともに原発事故の風化が進み、生活も原発事故前の状態に戻りつつあります。お子さんとお母さんの健康状態もおおむね良好で、お母さんの心の状態も安定してきています。しかし、母子ともに現在は健康であるが、将来の子どもの生活や健康に影響があるのではないかという不安は解消されていません。くわえて、補償不公平感や情報不安など、さまざまな課題も残されています。

福島子ども健康プロジェクトは、今後も福島県中通り 9 市町村の親子の生活と健康状態を定期的に記録し、広く社会に伝えていきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

福島子ども健康プロジェクト

福島
子ども健康
プロジェクト